社会教育課題研究2009年度報告書

地域づくりと生涯学習

調査対象地:福島県東白川郡鮫川村

2010 年 3 月

福島大学行政政策学類

２００９年度　社会教育課題研究

福島県鮫川村および富田地区の概要　1-1～1-10

夢づくり協議会の歩みと展望　2-1～2-10

地域ぐるみの高齢者支援の取り組み　3-1～3-4

富田地区における環境資源再生の取り組み　4-1～4-3
　　－中山間地域直接支払いから夢づくり協議会へ－

中沢集落における地域活性化の取り組み
　　－梅加工とめん羊組合－　5-1～5-10

富田地区における交流活動　6-1～6-14
　　－新たな気づきとつながり－

報告資料
　　集落活性化県民討論会 in 福島　～大学生の力が地域を変える！～　1-9

福島県鮫川村および富田地区の概要

はじめに
１. 鮫川村の概要
⑴ 地理及び現在の村勢
⑵ 村づくり
1) 自立の選択とまめで達者なむらづくり
2) 条件不利を活かした源流の里山、環境にやさしい農業
3) 中山間地域直接支払制度の利用
4) 村づくりの課題と可能性
２. 富田地区の概要
⑴ 富田地区の現状
⑵ 中山間地直接支払を活用した地域づくり活動
⑶ 地域づくり総合支援事業の利用
おわりに

はじめに

地方の疲弊が叫ばれて久しいが、その状況はますます悪化の一途を辿っている。平成の大合併や三位一体の改革による影響、あるいは少子高齢化や人口減少、財政悪化などさまざまな問題が複雑に絡み合い、地方のみならず日本中を直撃している。100 年に 1 度の未曾有の不況とも言われたこの時代に、人々も地域も疲れきってしまっているのではないだろうか。

しかし、そんななかでも諦めることなく懸命に学び、活動し、人間らしく豊かに生きようとしている地域、そして人がいる。今回私たちが調査に入った福島県鮫川村もそんな地域の一つである。鮫川村は 2003 年の住民投票で合併反対が 71%となり、近隣町村との合併をしないことを選択した。自立の意識が高い住民が多い鮫川村は、小さい村ながら行政と住民とが協力し様々な地域活動を行なっている。都会に比べ生活に不便なことは未だに多く地理的条件も決して良いとはいえない鮫川村だが、人々はそこにあるものを活かし、なんとかして自分たちの暮らしをよりよいものにしようとしている。

私たちの調査ではそのようなことを探るため、住民にとってより身近な単位である地区レベルで様々な地域課題に向き合い、解決を図るための組織を住民が主体的に作ったことの意味に焦点を当てて調査を進めることにした。そこで特に鮫川村の行政区の一つである富田地区を中心として、さまざまな「人」から直接お話を聞くことで、見えてきた鮫川村、また富田地区の地区が主体的に取り組むことの可能性と難しさについてまとめることとす

る。その導入としてまずは鮫川村および富田地区の概要について述べていく。

１．鮫川村の概要

(1) 地理及び村勢

鮫川村は福島県の南端、東白川郡の北東部に位置し、東は古殿町といわき市に接し、西は棚倉町と浅川町に、南は塙町と茨城県北茨城市に、北は石川町に接している。

鮫川村は阿武隈高原南部の頂上部にあるため、山脈丘陵が連なり、村の大部分は 400 mから 650mの範囲にある。耕地は山峡に開け、丘陵部の緩傾斜地の多くは、採草放牧地に利用されている。

総面積は 131.30km² で、林野面積が 9,782ha と総面積の 76.0%を占め最も多く、農用地が 1,770ha、宅地が 56ha などとなっている。人口密度は 32.1/k ㎡、農家率は 64.7%である。

交通条件をみると、主要幹線道路として国道 289 号が村の南部を横断し、349 号が村を南北に縦走している。車で白河市へ約 45 分、郡山市・いわき市へそれぞれ約 1 時間、県都福島市へ約 2 時間の距離にあり、首都圏へも 3～4 時間の位置にある。周辺には東北自動車道、常磐自動車道、東北新幹線、福島空港への高速交通体系も整備されている。

2010 年 1 月 1 日現在、人口は 4,209 人、世帯数は 1,159 戸である。

（２）村づくり

1) 自立の選択と「まめで達者なむらづくり」

先に述べた地理的条件からもわかる通り、鮫川村の基幹産業は農業で、かつては養蚕や葉タバコ、こんにゃくなどが盛んに栽培されていた。しかし、輸入自由化の影響や農業就業者の高齢化と後継者不足が進み、鮫川村の農業は厳しい状況になっていった。そんな情勢の中、農業の不振や地域経済の低迷、地方交付税の削減などの停滞感と閉塞感から、近隣３町村での合併が持ち上がる。しかし、この合併に対して村民は、「小さい村はいっそう廃れてしまう」との危機感を抱き、住民投票でも反対票が 71 パーセントという結果になった。この結果を受けて前村長は辞任し、現在の大樂村長が無投票で就任することとなった。

ここから、村長の「高齢者の大豆づくりから地場産業の振興を図り、沈んでいる村の経済、村民の心に元気を取り戻したい、笑顔が絶えない健康で長寿の村をつくりたい」、という思いから多くの村づくり事業がスタートした。

中でも注目すべき事業は、第３次鮫川村振興計画として平成 17 年度から行なわれている、「まめで達者なむらづくり」である。「まめな暮らしが育む(スローな)環境を生かしたやす

らぎとふれあいの村」を基本理念にしている。鮫川村そのものを地域ブランドに自立する、まめな暮らしを生かした村づくりを実現するために、次の４つのことに取り組んでいる。①地域資源の活用を「まめ」に、②農村景観の維持と活用を「まめ」な暮らしで、③生活安心を「まめ」な協力で、④人づくりと地域産業の育成を「まめ」に、である。

豆で達者な村づくりでは資源循環型農業を推進することを中心としている。なかでも中心となるのが、豆づくり事業であろう。豆づくり事業とは、地域の担い手は「元気な高齢者」であるとして、村の高齢者が大豆やエゴマを生産して、それの自家消費を除いた全量を村が買い上げ、村の加工所で味噌や豆腐、きな粉などに加工し販売することによって、６次産業化、地産地消を目指すという取り組みである。

この豆づくり事業がもたらす効果としては次の３つが挙げられる。まず１つ目は、高齢者の生きがいづくりと健康づくりを増進することである。鮫川村は高齢化率が 31.2 パーセントと高く、高齢者支援は重要なものである。そこで、村で昔から作られていた大豆を作ることで高齢者が張り合いのある日々を過ごし、それを食べることで健康でいて欲しいという狙いをもって、豆づくり事業が進められている。

２つ目の狙いは耕作放棄地の解消である。鮫川村は昔は養蚕や葉タバコ、こんにゃく芋の生産などが盛んだったが、農産物の輸入の自由化の影響や生産人口の減少により、使われなくなった田畑の荒廃が問題となっていた。そこで、大豆作りを奨励することでこの耕作放棄地の解消を図ろうという狙いが生まれた。

３つ目が特産品開発としての豆づくり事業である。村が買い上げた大豆やじゅうねんを使ってさまざまな加工品が作られ、「手・まめ・館」で販売されたり、学校給食に使われたりしている。特産品開発によって、第６次産業の仕組みを確立することが目的だった。加工技術を学ぶために、役場では職員を東京農業大学に派遣した。

そして上記の狙いは見事に的中し、その情報は新聞に掲載されるまでになった。豆を作ることと現金収入が増えることは高齢者の生きがいにつながっている。また、老人医療にも好影響を与えているという。平成１９年度(受給者７９７人)の一人当たりの老人医療費は６５万７５５５円でだが、大豆などの生産者は一人当たり平均４９万６３８２円だという。この数字からは、大豆を作って高齢者が元気になったのか、それとも元気な高齢者が豆づくりに取り組んでいるのかは判然としないが、少なくとも老人医療費の削減につながっていることがわかる。

「里山の食と農、自然を活かす地域再生計画」が総務省からの認定を受け、廃校となった幼稚園や小学校の「農業加工施設」への弾力的転用が認められてことも、農業の６次産業化に向けて大きな足がかりとなった。具体的には、旧西野小学校を「鮫川子どもセンター」として整備、旧富田小学校は農産物加工施設に利用、旧西山小学校を特別養護老人ホームとグループホームに、旧鮫川幼稚園は農産物加工・直売所「手・まめ・館」に改修整備、旧渡瀬保育所を農村体験交流施設「山王の里」に改修整備したことが挙げられる。

平成 17 年 11 月にオープンした「手・まめ・館」だが、これは元々旧幼稚園だったものを改築して農産物加工直売所として整備された村づくりの拠点となる施設である。館内には加工所、直売所、食堂があり、直売所には村内産の農産物や工芸品、大豆加工品がずらりと並んでいる。もちろんすべて鮫川産のものばかりだ。食堂は昼間ともなれば連日大勢の客でにぎわっている。「手・まめ・館」で自分が作った野菜を販売することは農家の希望づくり、やりがいづくりにつながることはもちろん、地産地消の推進の中心にもなっている。また、ここで特産物を販売することで、鮫川の人気スポットとしてマスコミの注目を集めることにも一役買っている。加工品や農産物の人気は高く、村外からのリピーターも多いという。従業員を 9 名雇っていることから、雇用の創出の場としても大きな役割となっている。

2) 条件不利を活かした源流の里山、環境にやさしい農業

鮫川村は鮫川、久慈川、阿武隈川の 3 つの川の源流部として、生活排水や工場排水の汚染のない、恵まれた水環境にある。そこで、この源流のきれいな水や里山の自然を活かした、低農薬、減化学肥料で、村の豊富畜産堆肥を利用する、環境にやさしい農業の推進へと農家の意識は高まっていた。循環型農業・環境保全型農業の推進として行なわれた有機の里づくり事業では、環境と人に優しい循環型農業の推進、農産物の安心・安全、鮫川ブランドづくり、若者が希望をもって農業に取り組める条件作りを目指した。その成果として、エコファーマーは 87 人、特別栽培農家は 9 戸にまでを増やすことができた。

また、鮫川村内の中心地の再生、美しい村づくりの実践として行なわれた、舘山公園の整備に関しては「もりづくり 100 年委員」の立ち上げを中心に、ゴミ拾いなどの地道な活動も行なわれている。山城の跡を整備する際の除草には 200 人のボランティアが参加するなど、村民が一体になる交流の機会にもなっている。

3) 中山間地域直接支払制度の利用

鮫川村では「中山間地域直接支払制度」を活用している。この制度は、中山間地等において、農業生産の維持を図りながら、多面的機能を確保するという観点から、農業生産条件の不利を補正するための施策として 2000 年に始まった。中山間地の多面的機能とは、水田や畑が、水源涵養や洪水防止、土壌の侵食や崩壊の防止緑豊かな景観の確保などの国土保全において重要な役割を担っているということである。しかしこのような地域の農地の多くは傾斜地であったり、まとまった耕地がないなど平地に比べ生産費がかさむため、耕作放棄地になる土地が増加している。そこで、交付金によって平地との格差を是正しようというものだ。

鮫川村もこの制度を活用し、平成 12 年度から平成 16 年度までの第 1 期では農地や水路の維持管理活動や耕作放棄地防止活動など、主に農地の維持管理に使っていた。しかし平成 17 年度の制度改正にともない、今までの交付金を受けるには、減農薬での農作物栽培、担い手への農業委託、非農家などとの共同作業を実施しなければならなくなった。従来の

維持管理だけでは交付金は8割になり、この状態で5年間事業を実施すると1年分もの交付金の差が出ることになる。そこで鮫川村では、これにはすべての集落が参加する必要があると考え、鮫川村協定間協定協議会を立ち上げた。ここでの特徴は74集落すべてが協定を結び、各集落が交付金のうちそれぞれ一定の割合で協議会へお金を預け、協議会がそれをプールするという形をとったことだ。70集落が通常単価12%、4集落が8割単価の6%を拠出したことで、1400万円が拠出金として集まった。これらは通常単価達成集落への助成や地域づくり活動への助成、事務費、研修費等に使われる。この集落からの拠出金があることにより、集落と村の信頼関係がより強くなったという。また、このような助成制度の試みは県内初の試みであり、特に鮫川村のようにソフト面の助成を行なうものは初めてである。

4) 村づくりの課題と可能性

以上のように合併をきっかけに農業を基盤とした村づくりに積極的に取り組んでいる同村であるが、役場担当者によれば、今後の村づくりの課題として以下のようなことが挙げられるという。ハード面では情報地域格差の解消、すなわち携帯電話不通話地区解消、光ファイバー通信網の設置、地デジ対策などがある。また、中心市街地の空洞化対策として、コンビニがない、商店の衰退などの問題が挙げられた。これらは特に若い世代のニーズへの対応となるだろう。携帯電話やコンビニが当たり前になった若い世代が鮫川村から出て行くことのない様にするには重要な問題であると考えられる。

また、公共交通機関の維持も大きな問題であるという。福島交通のバス路線廃止は、自分で運転することができない高齢者にとって、買い物や通院といった生活が脅かされるものとなっている。

様々な事業を展開しているものの、さらなる進展が必要な部分は確かにある。しかしながら、財政的にも、環境的にも厳しい条件の下で、ここまでの村づくり活動が行なわれていることは十分に評価に値するといえる。「まめで達者なむらづくり」を村民、行政が協力して進め、はっきりとした成果を見ることができるからだ。鮫川村の人は、現在できることを一歩ずつ着実に進めている。5年後、10年後の鮫川村がどうなっているのか、非常に楽しみに思える。

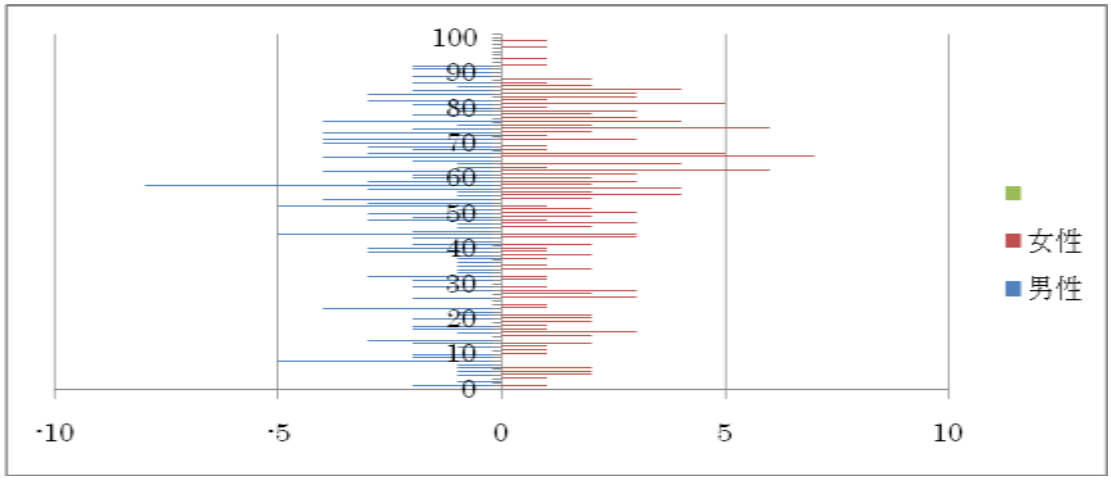
２. 富田地区について

（１）富田地区の現状

鮫川村には現在、西野、西山、富田、渡瀬、青井野、戸草、大房の全部で7つの行政区がある。そのなかで、私たちが今回調査に入ったのは、富田地区である。

富田地区は現在110世帯、345人が暮らしている。7つの地区の中でも最も高齢化率が高く、36.5%となっている。

図１．富田地区の人口構成



（出典：「年齢別人口統計表」平成 21 年 10 月 26 日現在（役場資料）をもとに作成）

表１．富田地区の年齢別人口

年齢(5 歳階級)別人口―平成 21 年 10 月 26 日現在				
	人	総数	うち男	うち女
年少人口	総数	345	177	168
	0～4 歳	9	5	4
	5～9 歳	14	10	4
	10～14	13	8	5
生産年齢人口	15～19	14	5	9
	20～24	14	8	6
	25～29	14	5	9
	30～34	11	7	4
	35～39	12	7	5
	40～44	22	13	9
	45～49	17	9	8
	50～55	24	16	8
	55～59	31	16	15
	60～64	26	10	16
	65～69	28	14	14
老年人口	70～74	27	15	12
	75～79	22	8	14
	80～84	2	9	13
	85～89	16	7	9
	90～94	7	5	2
	95～99	2	0	2
	100 歳以上	0	0	0

（出典：「年齢別人口統計表」平成 21 年 10 月 26 日現在（役場資料）をもとに作成）

この図と表からを見ると、男性は年代別でそれほど大きな変化は見られないが、女性の場合、0 歳から 40 代の人口がほぼ横ばいなのに対し、60 代より上の人口が多く高齢化が進んでいることがわかる。高齢化率は 35.9%で、特に 75 歳以上が 20%、すなわち 5 人に 1 人が 7 5 歳以上だということだ。また、55 歳から 64 歳が 57 人ということもあり、さらなる高齢化が進展することが予想される。また、5 歳刻みで見ると差はあるものの、ほとんどすべての層で 2 桁の人数がいるが、現段階で最も若い 0 歳から 4 歳の層が 9 人と 1 桁に下がっている。この点も少子高齢化が顕著に現れている点といえるだろう。

次に、表 1 の農業センサスの農業集落カードをもとに農家、非農家数の変化を見ていく。1970 年と 2000 年(2005 年は販売農家数しかわからないため。)を比較してみると、総農家数が微減しているのに対応して、非農家数が微増していると見ることができる。しかしながら、全体として農家が多いことは変わらないが、非農家数は農家数の半数以上となってきている。また、この表からは富田地区内の各集落レベルにおいて非農家率の違いも読み取ることができる。二反田では 2000 年の段階で非農家数が農家数を上回っているのに対し、中沢では非農家数は農家数の 4 分の 1 程度に留まっている。

表 2. 富田地区の各集落の農家数の推移

富田地区の各集落の農家数の推移									
	1970 年		1980 年		1990 年		2000 年		2005 年
集落名	農家	非農家	農家	非農家	農家	非農家	農家	非農家	農家
二反田	13	2	12	2	10	6	9	11	7
鍬木田	41	0	36	5	31	5	28	10	25
前沼	24	10	24	2	20	10	19	14	19
中沢	21	0	19	0	18	1	15	4	15
計	99	12	91	9	79	22	71	39	66

(出典：農業センサス集落カード各年より作成)

※2005 年センサスでは総農家数および非農家数が計上されていないため販売農家数のみ掲載した。また、表中の集落名は農業センサス上の集落区分によっているため、実際の集落数とは異なる。

（2）中山間地直接支払交付金を活用した地域活動

この制度を利用し、地域づくり活動を行なっているのは村全体では 50 集落に上る。そのなかでも、私たちが今回の調査地とした富田地区の集落の取り組みについてまとめてみる。一つ目は、中沢集落の『「めん羊」の里づくり』である。この事業は、この章以降で触れる「夢づくり協議会」にも大きく関わってくる事業である。協定参加者は 24 人で、交付金額は 316 万 6 千円、主な活動内容は、めん羊放牧地の整備、めん羊導入、めん羊の飼育

管理である。集落でめん羊を導入し、遊休農地に放牧することで遊休農地の解消と自給飼料の確保を図る狙いがある。また、めん羊の飼育管理を地域住民と一緒に行なうことで動物愛護の精神を養い、めん羊と触れ合える地域づくりに取り組むとしている。この活動については別の章で詳しく説明があるが、めん羊を中心として集落にまとまりができたという。

次に紹介するのが、二反田集落の『舘山花見公園整備』で、協定参加者は 26 人、交付金額は 357 万 8 千円という事業だ。活動目的は、集落中心部にある「館山」に景観作物を植栽し、遊歩道を整備して「舘山花見公園」を整備したいというものである。さらに、伝統行事の「かっくれい」「むじなっぱたき」を後継者に継承していく活動も考えられている。この活動も、後に「夢づくり協議会」の活動に引き継がれていくことになる。

3 つ目が鍬木田集落の『「花」の咲く景観づくり』である。「ヤマユリ」の自生地が村道沿いにあるため、ヤマユリの保護活動に取り組むというものである。また、集落の集会所周辺に景観作物を植栽し、農村景観の向上に取り組むことも目的である。協定参加者は富田地区では最も多い 34 人で、交付金額は 306 万 9 千円、主に景観作物植栽費に使われている。

4 つ目が大清水集落の『「ゲンジボタル」の里づくり』である。集落内の農地や沢には「ゲンジボタル」や「ほとけどじょう」等の希少生物が生息しているため、地域住民と共同で希少生物の保護活動に取り組むというものである。また、地域の子どもたちを対象に自然観察会を実施し、「ゲンジボタルの里」づくりに取り組む狙いだ。この事業の協定参加者は 8 人、交付金額は 181 万円である。

最後に、前沼集落の『花が咲き競う里山づくり』については、協定参加者 6 人、交付金額 103 万 1 千円となっている。この事業は、集落の中心を通っている県道沿いに水仙やコスモスなどの景観作物を植栽・管理して、集落を通る通行者の癒しの道路として親しんでもらえる「花の里」となるよう取り組んでいる。

上でも何度か触れているが、これらの取り組みはその後「夢づくり協議会」の基礎となる活動となっている。

3) 地域づくり総合支援事業（サポート事業）の利用

富田地区では、先に述べた中山間地域直接支払制度のほかにも、「地域づくり総合支援事業（過疎・中山間地域コミュニティ再生支援枠）」の制度を利用している。この事業は、福島県が行なっていた地域づくり総合事業（サポート事業）の中に、平成 20 年度から新たに「過疎・中山間地域コミュニティ再生支援枠」が創設されたものだ。地域住民自らが主体的に住みよい地域づくりに取り組む機運を高め、集落機能の低下が見られる過疎・中山間地域の地域コミュニティを活性化することを目的としている。事業の実施に当たっては、市町村と県が連携して企画段階から事業実施まで積極的に関わっていくことを特徴としている。

事業主体は、過疎・中山間地域の地域コミュニティ組織（行政区・自治会・町内会）、市町村である。対象事業は、①地域コミュニティの再生に関する事業で、（単なる維持修繕は

除くもの)、②地域コミュニティの再生に関する計画策定事業、である。補助率及び補助限度額は、①の地域コミュニティの再生に関する事業には、5 分の 4 以内の補助率、補助限度額はコミュニティで 500 万円を上限、市町村で 700 万円を上限としている。②の地域コミュニティの再生に関する計画策定事業に関しては、10 分の 10 以内の補助率、補助限度額は 30 万円を上限としている。また、②を実施後に①を行なう場合は、100 万円まで 10 分の 10 以内の補助率、100 万円を超える場合は 5 分の 4 以内の補助率、補助限度額は、コミュニティでは上限 500 万円、市町村では 700 万円となっている。

補助期間は原則 1 年で、発展的な事業等については 3 年を限度に継続できる。事業期間は平成 20 年度から平成 22 年度の 3 年間である。

これまでのサポート事業(一般枠)との主な相違点としては、対象事業や補助率、事業費の下限などが上げられる。サポート事業、コミュニティ再生枠では、富田区の「夢づくり協議会」のもととなる、「水源の里　富田地区地域再生事業」のほかにも様々なものがある。県南地方振興局では、塙町真名畑区による「あんずの里づくり整備事業」や同じく塙町矢塚区の「矢塚地区観光開発整備事業」、塙町片貝区の「絵本『かっぱのすりばち』による片貝区地域おこし活動事業」、などが行なわれている。

おわりに

鮫川村及び富田地区は決して便利な環境ではない中でも、人と人、集落と集落、集落と行政など、様々な協力の形を結びながら何とか地域を元気にしようと前向きに活動に取り組んでいることがわかった。その活動もアイディアやバラエティに富んだものであり、既存の枠に囚われずに積極的に活動へと向かっていた。そしてそれらの活動は「ないものねだりではなく、あるもの活かし」が基本であるように思える。この「あるもの活かし」の姿勢は住民自身の活動はもちろんのことだが、行政の政策があってこそ浸透していったものだとも言える。従来、鮫川村の人は都会と比較し鮫川村には何もないとネガティブになっていたが、様々な活動を行なっていく中で実は鮫川村には魅力が溢れていることに気づき、自信をもっていったのだと感じた。

この章では概要や制度的な説明が多くなってしまったが、実はこのような話を聞かせてくださった方々がみなさんとても魅力的だった。ある人は情熱的に、またある人は淡々とお話を聞かせてくれたが、共通するのは自分たちの活動に自信と誇りをもち、意欲的に活動しているということだ。そんな想いを秘めたお話を聞かせてくださる方々は、皆とてもいい表情で、素敵な笑顔だった。このような人がたくさんいる鮫川村はとても魅力的で、また来たいと思えるところだった。

そこで、今回のフィールドワークでは、「人」に注目し、様々な組織や活動を通して鮫川村及び富田地区の魅力や現状を探ってきた。これ以降の章ではそのことについて詳しく触れていくことにする。

参考資料

役場企画調整課担当者作成資料　2009 年 6 月 3 日
『「地域づくり活動」取り組み事例』　2009 年 10 月鮫川村役場農林課
『鮫川村勢要覧 2009』　鮫川村役場企画調整課
鮫川村ホームページ
『水源の里　富田地区再生事業』　富田区・富田地区夢づくり協議会
町村週報 2602 号　2007 年 6 月 11 日付号　大樂勝弘村長

富田地区夢づくり協議会の歩みと展望

はじめに
１．夢づくり協議会の計画概要
（１）計画の目的
（２）５つの専門部会
２．協議会設立と活動を支える仕組み
（１）発案から設立までとそれ以後の動き
　１）夢づくり協議会設立への原動力
　２）５つの専門部会ができるまで
　３）協議会設立後の動き
（２）活動を支える仕組み
　１）役場サポーター制度
　２）「とみた夢づくり通信」
　３）視察・研修
３．夢づくり協議会の展望
（１）部会員が語る課題と展望
（２）役場職員が語る課題と展望
おわりに

はじめに

厳しい時代、環境に置かれながらも、地域に愛着をもった人々がなんとか「元気を取り戻そう」と、地域固有の資源を生かした地域づくりに取り組んでいる。私たちが調査を進めてきた福島県鮫川村も、合併という選択肢を捨て、独自の道を歩んできた自治体の一つだ。その中でも私たちは、鮫川村富田地区で調査を進めてきた。富田地区の人々は、「富田地区夢づくり協議会」(以下、夢づくり協議会と記す)の活動の中で共に知恵を出し合い、地域づくりを進めている。

富田地区では中山間地域直接支払を活用し、集落活性化への取り組みが積極的に行われている。平成 21 年度から『水源の里　富田地区地域再生事業』として夢づくり協議会を発足し、活動をスタートした。「ないものねだり」ではなく「あるものいかし」の精神で、地域資源を生かした地域づくりを目指している。

私たちはこの一年間、夢づくり協議会の取り組みに注目して調査を進めてきた。ここでは夢づくり協議会の歩みと展望について、『水源の里富田地区地域再生事業』計画書、夢づくり協議会のメンバーの方、鮫川村役場職員の方などへの聞き取り調査の結果に基づきま

とめている。なお、調査は 2009 年 10 月までに行われたものである。

１．夢づくり協議会の計画概要

（１）計画の目的

富田地区では平成 20 年に夢づくり協議会を発足し、『水源の里　富田地区地域再生事業』として、計画期間を平成 21 年度から 25 年度とし動きだした。計画策定に当たっては、福島県の地域づくり支援事業「過疎・中山間地域コミュニティ再生支援枠」を活用し、財政支援を受けながら進めていった。補助期間は原則 1 年(発展的な事業等について 3 年を限度に継続できる)とし、事業期間は平成 20 年度から 22 年度とされている。

富田地区地域再生事業計画書によると、平成 20 年 3 月末現在の地区の世帯数は 112 世帯で、人口は 364 人、高齢化率は 36.5%と高く、村にある 7 つの行政区の中でも突出しているという。地区の課題としては、一人暮らしの高齢者の増加や、働き場が少ないために若者が流出していくなどの問題が挙げられている。また、自然環境の整備や伝統行事の衰退なども問題とされている。

このような課題を解決するため、交流、伝統文化継承、高齢者支援、特産品開発、里山公園整備の 5 つのテーマの専門部会を設け、検討した上で計画が立案された。そして将来的には、地域資源を余すところなく活かすために「富田まるごとコミュージアム」（自然生活文化博物館）構想の実現を目指している。

（２）５つの専門部会

夢づくり協議会の主な活動は、5 つの専門部会によって行われている。それぞれの部会は 4~6 人の住民と、1~2 人の役場職員で構成されている。それぞれの事業部の活動の概要については、<表 1>に示した通りである。具体的な活動内容に関しては本報告書の別章で取り上げられているので、そちらをご覧いただきたい。

5 つの部会ができるまでには、富田地区の住民の様々な思いや取り組みがあった。以下で協議会ができるまでの経緯を追っていく。

２．協議会設立と活動を支える仕組み

（１）発案から設立までとそれ以後の動き

１）夢づくり協議会設立への原動力

夢づくり協議会前会長の大平忠一さんは、「地域に疲弊があった」と語った。そう感じた大きな出来事は、長年続いてきた富田区の伝統行事、八朔踊りの中止だという。太鼓をできる人も踊りにやって来る人も年々少なくなっていき、しまいにはカラオケ大会でもしようか、という話も出てくるほどだった。もともと富田区の人々が大勢集まるような行事は八朔踊りと地区のスポーツ交流会のみで、その大切な伝統行事も中止せざるを得なくなったのだ。その他にも、地区で太鼓の競技会を開こうとしても演奏者が 5 人程しか集まらず、

結局開催できずじまいになったこともあったという。「誰しもが『どうにかしなくては』と考えていたが、具体的な話には踏み込めなかった」と、大平さんは当時を振り返る。

そうした背景があり、大平さんは「富田区でもなにかしなくてはいけない」という切迫した思いをもち、富田区の村議会議員の青戸孝夫さんに「もし富田でやれそうなことがあれば、情報を仕入れてほしい」と依頼した。そして、鮫川村役場に相談する中で提案を受けたのが、福島県の地域づくり総合支援事業「過疎・中山間地域コミュニティ再生支援枠」だった。この事業は「地域住民自らが主体的に地域づくり取り組む機運を高め、過疎・中山間地域の地域コミュニティを活性化する」ことを目的に、様々な支援・補助を行うものだ。「何はともあれ、手を上げてみよう」と、富田区の人々は夢づくり協議会の設立へ動き始めた。

２）５つの専門部会ができるまで

協議会の設立に当たり、最初のうちは大平さんが集めた 5、6 人ほどで話し合いを進めたという。これらの人々はいずれも長い間富田区で暮らし、独自に交流活動などを行ってきた方々である。その話し合いの中で、まずは 5 つの専門部会をつくるという構想ができていった。この段階からすでに協議会の目的を一つに限定する（例えば八朔踊りの復活）という発想はなく、地域の活性化に必要なことを考えた結果、5 つの部会を置くに至ったという。この 5 つの部会は全く新しいことを始めようとしたわけではなく、夢づくり協議会設立以前から事業を行っているものがいくつかあり（自然体験、ホタルの里づくり、めん羊の飼育、特産品開発など）、芽生えつつあったものを形にしていった。中でもホタルの里づくり、めん羊の飼育は、以前から中山間地直接支払を活用して行われていたものであった。特にめん羊の飼育については、区内の中沢集落で活発な議論を通して行われていたものであった。「中沢集落だけでなく、富田地区全体を巻き込んでいってほしい」という特別な思いが、その後の特産品開発における中沢集落との協力体制にもつながっていったと思われる。

その後は部会員の候補者選びに入っていった。人選と部会への割り当てについては、主に大平さんと当時の副会長である青戸良一さんが中心となって進めていったという。選定に当たっては、候補者それぞれの経験を特に参考にした。例えばホタルの里づくりに取り組んでいた方は交流事業部に、高齢者とのふれあいサロンを開いていた方は高齢者支援事業部に、といった具合である。候補者選びを経て実際に依頼をする際には、一人ひとりのお宅に自ら出向いて行き、「知恵を貸してくれ」と訴えていったという。中には一人で暮らしていることへの生活不安、仕事と生活の両立への不安から、止むを得ず断った方もいたそうだ。

夢づくり協議会の計画は、富田区の評議員会や総会を経て正式なものとなった。総会は意思決定手続における最高機関で、そのもとに評議員会が置かれる。評議員会は 6 つの小字から選出された代表者 6 名で構成され、総会にかけて決定する。評議員はいわば富田区

の議員で、評議員会が実質的な意思決定機関であるとも言われている。また夢づくり協議会専門部会の中で話し合われた内容を、区内にある協議会以外の組織の代表に伝える場として、事業調整会議がある。この事業調整会議は、議論の場というよりは情報伝達の場として機能しているという。

順調に見えた協議会設立の動きであったが、地域内の団体から不安や反対の声も上がった。「荷物になるようなことを受けてくるな」という痛烈な批判も少なからずあったそうだ。原因として挙げられるのは、その時点では何をするかなどもまだ具体的でなく、情報の伝達がうまくいかず誤解を招いてしまったことだという。

こうした段階を踏み、平成 20 年 8 月に夢づくり協議会が設立し、取り組みが始まった。人々の思いが、地域を変える力を生み出していったのである。

３）協議会設立後の動き

夢づくり協議会設立後の動きについては、鮫川村役場企画調整課の鏑木重正さんにお話を伺った。鏑木さんは夢づくり協議会事務局として、役場職員の中でも中心となって事業の支援に取り組んでいる。

協議会設立当初は、まず事業の仕組みを理解してもらうところから始めていった。「初めての取り組みだったから、区民の中に事業が浸透し、区民の総意でもって事業が進むようにしたかった」と鏑木さんは語る。単に計画を作って与えるだけではなく、「富田区にはなにがあるのか」ということを、全体で共有しようとする意図がそこにはあった。

最初は一つの大きなテーマ（「富田区にはどんな地域資源あるのか」）について話し合われた。そこでは長年暮らしてきた住民だからこそ見える、身近な魅力が語られていた。語られていた内容として次のようなものがあったという。

- 「○○には～の花が△月ごろたくさん咲いている」
- 「○○は△月ごろ、とても景色がよくなる」
- 「○○には昔、～（石や鉱山）があった」
- 「○○さんは、酒づくりが上手くて、～さんはつけものづくりがうまい」

こういった地域資源を部会員で共有した上で、活用していくにはどうすればいいかを話し合い、各部会の目標を具体的に定めていった。「普段は気がつかない素晴らしいものがあることをまず、住民に理解してもらうことを大事にした」という。

会議の進め方として一年目は、部会員全員が集う専門部会合同会議の場を設け、専門部会ごとに話し合いをした上で、全体でその内容を確認するという形が多かったという。しかし二年目は、専門部会ごとの会議が中心となり、専門部会合同会議は開かれていない。本来なら活動がより具体的になっていくほどに、全体での情報共有や議論の場を設ける必要性は高まるのではないだろうか。

（２）活動を支える仕組み

１）役場サポーター制度

活動を支える大きな仕組みとして、「役場サポーター制度」を置いた。役場職員 1~2 人がサポーターとして各部会を担当し、主な役割は協議会の活動の上で必要な事務手続きを住民に代わって行うことである。事務手続きは住民にとってはなかなか大きな負担であるため、役場職員による補助がどうしても必要になってくる。職員は知識や能力により、適材適所で担当が決められる。以下の実例を見てみると、職員の経験を重視しているように思われる。

交流事業部	企画調整課の職員で、大学との交流事業を担当していた方
伝統文化継承事業部	教育委員会の職員で、地域の歴史や文化に詳しい方
高齢者支援事業部	住民課の福祉分野での経験のある職員
特産品開発事業部	商工観光の係を務めていた職員
里山公園整備事業部	農林課の職員で、ハード面の整備のノウハウを持っている方 富田区で幼いころから暮らしてきた職員

このように職員を配属したことには、一つの理由がある。以前村内で合併の議論がなされた際に、地区に職員を配置し、集落支援の取り組みを試みたことがあった。だがその取り組みは長続きせず、うまく機能しなかったという。その原因としては、集落が求めるものがわからなかったこと、職員の日常業務の忙しさ、割り当ての必然性のなさがあった。その時の反省を基に、役場サポーター制度はできていったのだという。

事務手続きの代理の他にも、計画書作成に当たってのサポート、資料提供や視察先の提案も行っている。本来なら住民だけでできることが望ましいが、現実的にはなかなか難しいという。また役場サポーターが専門部会合同会議の前に開く、サポーター会議というものもある。次回の合同会議で何を話し合うか、それまでの経過についてサポーター内で会議する。合同会議においては、部会員の総意でもって計画を決めることや、区の問題を住民の中で共有できるようにサポートを行っている。協議会設立当初は住民だけで会議を進めることすら難しく、役場サポーターの役割は大きかったという。それ以後はあくまで「サポート」であることを念頭に置き、最終的には完全に独立した住民の活動の実現を目指している。

２）「とみた夢づくり通信」

「とみた夢づくり通信」(以下、夢づくり通信と記す)は、富田区の住民に夢づくり協議会の活動状況を報告するために発行されている。A4 一枚の片面印刷で、写真も多く盛り込まれたものになっている。夢づくり協議会事務局が制作し、発行は不定期で、回覧板といっしょに全戸配布されている。主な内容としては、会議の様子や近況を伝えるものだ。また、

一部の人が事業を行っているのではないこと、その気があれば誰でも参加できることを伝える役割もあるそうだ。以下の表は、これまでに発行された夢づくり通信 No.1~5 の発行日と内容を簡単にまとめたものである。

No.1	2008/09/12	大学教授を招いた講演会の様子
No.2	2008/10/31	専門部会会議の様子　テーマ：「富田地区の地域資源と地域課題」
No.3	2008/12/01	視察研修の報告（直売所の視察）
No.4	2008/12/26	専門部会合同会議の報告・高齢者へのアンケート調査実施の報告 交流部会による里山現地調査の報告
No.5	2009/02/27	大学教授を招いた講演会の様子・事業調整会議の報告 「県南地方元気づくり交流会」への参加報告

(2009 年 10 月末現在)

夢づくり通信は住民に活動状況を伝える媒体として、重要な役割を果たしている。しかしながら、いくつかの改善すべき点も考えられる。第一に、第 5 号が発行されてからも大きな動きがあったにも関わらず、通信を発行できていないことである。現に八朔踊りが見事に復活した時、残念ながら通信は発行されなかった。活動が本格化する二年目以降こそ、定期的に通信を発行し、住民に動きを伝えていく必要があるのではないだろうか。二点目としては、夢づくり通信の発行を事務局に任せきりにしている点だ。住民による活動を伝える通信は、やはり住民自身が創ることが大切なのではないだろうか。当事者だからこその熱をもった文章こそが、一般住民の関心をより引き寄せ、活動の広がりにもつながっていくと考える。役場サポーターが支援しながら、少しずつ住民の手に移していくのがよいのではないだろうか。

３）視察・研修

部会員が地域づくりを学ぶために、21 年度は個人も含め、十数回の研修・視察を行っている。県の講習、NPO 事業、フォーラムなどに参加しており、研修費は予算で賄われている。情報源としては、県南地方振興局や鮫川村役場企画調整課からの提案がある。

中でも印象に残っている視察先は、いわき市田人町と茨城県の「ポケットファームどきどき」、農産物加工直売所「かたくり市」だったという。田人町は市町村合併で周辺部になってしまった地域で、公共交通機関が十分に整備されていないなど、富田地区と環境が似ている部分もあったそうだ。それでも視察当日は多くの人が足を運び、賑わいを見せていた。田人町は地域の食を売り出す直売所と湧き水が有名な所で、マップ（散策コース）などもしっかりしていたため、「これまでの視察先の中でも最も参考になった」と大平さんは語る。一方で茨城県の「ポケットファームどきどき」、農産物加工直売所「かたくり市」は、その規模があまりにも大きすぎるゆえに、モデルにするのは難しく感じられたという。そ

の雰囲気に圧倒され、驚きが大きかったように思われる。

３．夢づくり協議会の展望

（１）部会員が語る課題と展望

夢づくり協議会が設立されたことの意義として、高齢者支援事業部に所属する大平啓子さんは、「鮫川全体ではなく、富田の人たちだけでひとつの問題に対して話し合えたことがよかった」と語る。ずっと前から知っている人たちとの間でも、同じ問題について意見を出し合うことで「そういうことを考えていたのか」と感じることがあったという。こうした気付きを得られる場ができたことが、夢づくり協議会設立の成果とも言えるのではないだろうか。

一方でいくつかの課題もあるようだ。地域づくりに必要なのは「よそもの・わかもの・ばかもの」、そしてやはり「お金」であると大平忠一さんは語る。お金の問題に関しては、メンバーでお金を出し合ってなにかをするということは実際のところ難しく、アクションを起こしたくても何もできないのだという。大平さんは夢づくり協議会の活動として、次のようなことをやりたいと考えているという。

・富田区内のマップづくり
・餅をつくためのきね、うすの購入
・しいたけの埴菌
・体験交流に参加した人々への食の提供
・里山公園のトイレ等設備の設営

すぐに出てくるだけでもこれだけの構想があり、頭の中にはもっと多くのアイディアがあるのだろう。しかし詳しく聞いてみると、予算の使い方に対する県の査定の厳しさに、多少の不満を持っているようであった。アイディアを実行に移すことができず、歯痒い思いをしているのではないだろうか。

部会に若い人が少ないことも、やはり大きな問題だという。部会員は最も若い人でもすでに 42 歳で、夢づくり協議会の中心となっているのは高齢者の方々だ。伝統行事の太鼓や笛、踊りなどのスキルを継ぐ人も不足しており、それは文化の衰退にもつながりかねないことだと語る。また、部会員による研修は積極的に行われているが、部会員以外の住民との議論や研修の機会は今のところ設けられていないという。大平さんは「部会員以外との話し合いをしなければ行き詰ってしまうだろう。区全体を巻き込んだ活動にするためにも、当然機会をつくることは必要ではないか」と語っている。そこでまずは、専門部会ごとなどの小さな範囲での議論の場をつくることを考えているそうだ。

（２）役場職員が語る課題と展望

鏑木さんは一年半に亘る部会員の活動を見て、「今まで自分が知っていた世界よりも、より広い世界を知ったのではないか」と感じたという。そして「住民それぞれが、自分たちに何ができるか考え始めたこと。『よくしよう』という努力そのものが成果」であると語った。夢づくり協議会の設立により、住民の中にも確かな変化が見られたのではないだろうか。また、富田の将来における現実的な問題を、まだ部会員の範囲ではあるが共有できたことも評価している。

一方で課題については、こちらもやはり後継者の問題を大きく考えているようだった。現在活動の中心になっているのは 60~70 代の人たちで、その人たちができなくなった時に誰が中心になっていくかという問題がある。鏑木さんは「若い人がやっていくことで大きな輪になれば、より進展していくのではないか」、そして「若い世代が『後は見守っていてほしい』と言えるようにまでなってほしい」と、新しい世代への希望を持っていた。

資金については、お金をかけたからといって活性化につながるわけではないので、できる範囲で身の丈にあった活動をしていきたいと語っているのが印象的だった。福島県からの支援が平成 23 年度までなので、それ以降は必要に応じて支援事業を探していくつもりだという。

最後に事業全体への展望として、誰でも気軽に話し合える場をつくること、最終的には住民だけで独立した活動を行ってほしいと語っていた。

おわりに

地域づくりとは決して新しいことに手をつけることではなく、もともともっている地域の個性を伸ばすことではないだろうか。富田地区はまさにその通りに活動を進めていて、設立に当たってまず「地域の魅力を語りあう」場を設けたことは、「あるものいかし」の原点ともいえる。誰かに与えられたのではなく、一つ一つ積み上げていくプロセスを大事にしたものであることに、夢づくり協議会の意義がある。

これからの活動をより活発なものにするためには、女性の意見を反映させられる仕組みづくりと、若者を取り込んでいくことが必要であろう。部会での女性の立場についてある女性部会員の方は、「女性が会議にあまり出られないため、女性の意見が通りにくい。地区の総会も世帯主が出ることが多く、女性が代理で出たとしても発言はしにくい」と語っていた。これまでの協議会の活動は、男性が中心となって動くことがどうしても多くなっていたのではないだろうか。また、事業を継続し将来にわたって発展させていくためには、若者の存在が必要不可欠だ。20~30 代の人々をいかに取り込んでいくかが、今後の活動の鍵になるだろう。

そしてこれからの活動で最も必要なことは、「成果」を目に見える形で出していくことではないだろうか。決してお金を稼ぐことや、観光客の増加を重視すべきだと言いたいのではない。特産品の商品化でもいいし、里山公園の整備でもなんでもいい。住民の取り組みによって何かを生み出したことを実感することで、次の活動への意欲も高まるし、新たに

興味を持つ人も出て来るかもしれない。だからこそ、夢づくり通信などで活動状況を定期的に伝えていくことが大切なのである。区民が活動について詳しく知り、考える機会を持つことで、行動につながっていくであろう。

現段階では協議会も動き出したばかりで、住民に活動が浸透していくのはこれからだろう。だが小さな波が大きなうねりになって地区全体、そして村全体を巻き込んでいき、富田地区の活性化から鮫川村の活性化にもつながっていくのではないだろうか。新たな夢を追いかけていく姿勢を持ち続け、これからも活動を発展させていってほしい。

〈表 1〉５つの専門部会の計画概要

交流事業部 交流事業部では、富田地区の魅力的な自然、歴史遺産、伝統文化、食、生活文化を活かした、体験交流の観光地づくりを目指している。 事業概要 ・交流を通した「里山ふれあい体験の森」の整備、みどころマップの作成 ・里山ガイド・語り部・農家民泊受入農家の育成
伝統文化継承事業部 伝統文化継承事業部では、富田地区に昔から伝わってきた伝統行事の継承と祭の復活を目指し活動を進めている。 事業概要 ・伝統行事や祭りを復活・再建し存続していくための体制整備、音と映像での記録保存 ・笛や太鼓や謡などの技術習得のための講習会開催。
高齢者支援事業部 高齢者支援事業部は、高齢者が安心して生活できる地域をつくるために活動している。小さな地区だからこそできる支援の仕組みづくりを目指している。 事業概要 ・高齢者を見守る（声かけ・御用聞き）のための仕組みづくり ・高齢者の生きがいづくり
特産品開発事業部 特産品開発事業部では、観光梅園づくりや梅をはじめとする特産品開発を進め、住民の所得向上と地域経済活性化を図っている。 事業概要 ・色々な種類の梅 1000 本を植樹し、観光梅園として整備する。 ・梅の木オーナー制度に取り組む ・地元の食材や資源を生かした特産品の開発、商品化するための施設整備
里山公園整備事業部 里山公園整備事業部は、富田地区の歴史的遺産ともいえる菅生舘を地区民のシンボルとして整備、花や木の栽培を進め、住民の憩いの場をつくることを目標として活動している。 事業概要 ・散策路の整備（階段手すり、案内板設置）、花木の栽培、景観を損なう雑木の伐採 ・桜老木を樹木医に診てもらう。 ・大清水周辺を憩いの場として整備する。

（出典：『水源の里　富田地区地域再生事業』計画書より）

地域ぐるみの高齢者支援の取り組み

はじめに
1. メンバーについて
2. 高齢者の健康づくりのための組織
3. 事業の進行状況
4. 考察

はじめに

高齢者介護や支援が問題となっている。独居老人、ネグレクト、孤独死、老老介護。そんな中、鮫川村全体の高齢化率が 31.2%であるのに対して富田区の高齢化率は 36.5%となっており、他の行政区と比べても高くなっている。富田区ではそのような状況を受けて高齢者支援事業部が立ち上げた高齢者支援に取り組んでいる。

1. メンバーについて

高齢者支援事業部は男性２名女性５名の計７名で構成されている。部会員の女性の中には、以前に村内・区内の組織で高齢者の支援をする役職をしていたという方が多い。青戸カツ子さんは、民生委員を１期、保健推進委員を２期務めており、普段から自主的にお年寄りの家を訪ねて生花を届けたりしている。松本弘子さんも同じく民生委員をしていた。大橋君江さんは食生活推進委員と婦人会の役員をしていたという経験がある。大平啓子さんは、農協の元生活指導員であり、現在はふれあいサロンを開いてお年寄りに交流の場を提供している。

また、男性メンバーとしては部会長の松本精一さんは准看護師の資格を持っている。松本源一さんは老人会役員の経験がある。メンバー自体が 60 代～70 代で構成されていて次世代の担い手の育成が課題となっている。

2. 高齢者の健康づくりのための組織

以上のように多くのメンバーは、高齢者を支援する地域団体組織に属している。その組織のいくつかを以下に紹介したい。

まず、「ふれあい教室」は、全村で行われている事業だ。高齢者の健康維持のための栄養教室と健康教室を年に ３・４回行っている。事業の名称はそれぞれの地区によって名称が異なる、富田地区の場合は「ふれあい教室」という名称で行っている。各大字のお年寄りを対象にした事業である。「ふれあい教室」の役員は区長、副区長、民生委員、老人会の会長・副会長、それから昨年度までは食生活改善推進委員と保健推進委員が担当していた。

今年度からは保健推進委員に代わって、健康運動サポーターが加わっている。富田地区の参加者は主に講師の健康の話しや交通安全についての話を聴く。21 年度の場合 7 月は開校式、保健士の話を聞く。11 月の会では食事を作ってお昼を食べて解散。2 月は閉校式、お昼を食べるといった活動を行った。

ふれあい教室に携わっている健康運動サポーターは、鮫川村で高齢者の健康を維持するために一定の研修を受けて腰痛・ひざ痛を防ぐための健康運動を一年間指導するというグループである。メンバーは、村内に約 50 名。この取り組みは福島県でも鮫川村が一番先進的であるという。健康運動サポーターは平成１８年から活動をしている。富田区では自主的に月に２回ずつ高齢者に集落センターに集まってもらって健康運動をしており、対象の地区民は 30 名くらいで、集落センターまで歩いて出て来られないという方がいるためにメンバーが決まった人に固定してしまっているという。

さらに、「ビーンズヘルスの会」という組織もある。ビーンズヘルスの会は、保健推進委員の事業の一環として始まり、月に 2 回体操教室を行っている。

ふれあいサロンは、8 つの集落でおこなわれていて、平成 20 年から社会福祉協議会でも行われている。富田では大平啓子さんがふれあいサロンを開いている。基本的には会場まで自分で歩いて来られる人を 5 人以上の単位で集めている。月 1 回 10 時に来て、漬物をお茶請けにお茶を飲みながらおしゃべりをして近況報告をする。会費のうち 350 円は村からお茶代として支給され、200 円をお年寄りから集め、食べたいものをみんなで決めて主催者の大平啓子さんと参加者の中の一人が２人で作る。

3. 事業の実施状況

高齢者支援事業部では夢づくり協議会の計画立案当時から調査を計画し、聞き取りアンケートを実施、高齢者のみ世帯の方の生活や支援の希望を調査した。そのアンケートは項目づくりから部会員でつくったという。後掲資料の通り、アンケートからは「手伝ってもらえるなら手伝ってほしい」という回答からわかるように、除雪を大変だと感じている方がいることがわかった。富田の家の特徴として、”かど”が長いということがある。富田には田畑や公道よりも高い位置、坂の上にあるお宅が多い。その家から公道にかけての坂を”かど”と呼び、その部分の除雪がたいへんだというのだ。お年寄りには難しい。

しかし、力仕事は困難だという一方で、アンケートでは、どの項目でも「自分でできる」と答えた方がいちばん多く、できるうちは自分でしたいという考えがあることがわかる。とは言うものの、「その他」という項目では「将来、施設入所を考えている」という方がいたということもあり、部会では、実はお年寄り自身も将来に不安を感じていることは否めないのかもしれないと見ている。「楽しいと思うことはどんなことですか」という項目に対しての回答を見てみると、総じてお年寄りにとって楽しみになっていることは子どもたちや友人、知人が遊びに家を訪ねてくれること、人と話をすることだとわかる。

部会が、アンケートを取りに訪問したところ1人暮らしはしているが、定期的に子供たちが様子を見に来ている例もあった。純粋な高齢者のみ世帯かどうかの判断が難しいという部会員の声も聞かれた。ただ、当面部会では家族と一緒に住んでいないと見られる高齢者(70代)1人暮らし世帯に特に重点を置いて支援していきたいと考えている。

現在は見守り隊「富田げんき支援隊」の目印となるベストが完成し、調査に入った9月は11月に活動を開始するという予定になっていた。ベストはメンバー数より多めの15着用意してあり、部会では部会員以外でもお話が好きな人などにご協力をお願いしたいと考えている。高齢者支援事業部では2009年12月8日に「富田げんき支援隊」という組織を立ち上げ、「げんき支援だより」という広報紙もつくる予定だ。

配食弁当の案も出ているが、保健所の手続きの関係で難しい問題があるようで、棚倉にある老人介護施設で先に実現しそうな兆しがある。しかし、従来行われている配食弁当は業者に委託をしている場合が多く、それとは違って手作りで健康的な食べ物を配りたいという希望を持っているのが当部会だ。

4. 考察

まず、自分たちの持っている限られた情報のみで事業を始めるのではなく、きちんと現状を把握しようと、一軒一軒を回ってアンケート調査を(聞き取り調査)実施しているということを素晴らしいと感じた。部会員たち住民自身が、パソコンを使ってアンケート集計をしたこと、また、部会独自の広報紙に取り掛かるなど決めたことをすぐ実行に移している。

広報紙については、もし広報紙の発行を定期化していくのならば、お年寄りに関するエピソードやインタビュー記事を載せると良いのではないだろうか。お年寄りにとって何かに記事が載るということは誇りと自慢になる。お年寄りが自分の記事を読んでさらに活き活きとしてくるのではないがろうか。

部会が行ったアンケート、聞き取り調査の中では、お年寄りには特にゴミ出しや門口の雪かきなどの力仕事が難しくなってきているということがわかった。夢づくり協議会全体として若者が少ないが、力仕事を若者に手伝ってもらえれば理想的だ。雪かきを業者に委託した結果2万円近くかかった例があるということも聞いた。若者の参加の必要性が強く感じられる。

鮫川村には上記に挙げたようにすでに高齢者支援の取り組みが行われており、しかも部会のメンバーの多くは積極的にそれに参加している。配食弁当については、お年寄りに手の掛かった温かい弁当を届けたいという思いがあることを聞いた。その心が実現できる形が見つかればと思う。特産品開発事業部との連携は難しいだろうか。

子どもたちが自分の子どもの成長とともに遠く離れたところでの生活になれてしまうと、故郷の親を訪ねる機会が減るというのは一般的によくあることであろう。だが、近年は「孤

独死」が問題になっていて、「御用聞き」や地域での訪問支援体制のありかたが注目を集めている。自分たちで高齢者支援のための事業を立ち上げて行うという試みは軌道に乗れば、地域に安心を与えることができるだろう。後掲資料のように『広報さめがわ』(2010 年 1 月)に高齢者支援部会の活動の様子が掲載されているが、これからもどんどん活動をアピールして支援の輪を広げていって欲しいと思う。

2009／8／30（s）

Ｔｏ．福島大学のみなさん　　Ｆｒｏｍ：富田区高齢者支援事業部

◎富田区高齢化率（Ｈ．２０．４．１現在）

総人口　３６４人	６５歳以上　１３１人	高齢化率　３６．５％

○富田地区の

高齢者のひとり世帯	高齢者のみの世帯
１５世帯	４世帯

◎ひとり暮らしの方への聞き取りアンケート内容と集計

年齢	７０代（７３歳～７９歳）６人　８０代（８１歳～８９歳）７人　計１３人
性別	男性　５人　　女性　８人

※アンケート内容とその集計

１、生活の中で困っていることや心配なことがありますか？

買い物
自分でできる　６人（うち娘に届けてもらう　１人）
知人やヘルパーに頼む　３人
農協の食材の宅配を利用　２人
週２回シルバー依頼　１人

通　院
自分でできる（バスやタクシーの利用も含む）６人
病院の送迎車　５人、妹に依頼　１人、無し　１人

食　事
自分でできる　１２人　シルバーの作りおきを電子レンジで温めて食べる　１人

掃　除
自分でできる　１０人、シルバー利用　１人、ヘルパー利用　２人

ごみ捨て
自分でできる　９人、息子に頼む　２人、娘に頼む　１人、ヘルパー利用　１人

家の周囲の草刈り
自分でできる　６人、息子に頼む　２人、知人に頼む　１人
兄弟に頼む　１人、シルバー利用　１人、金を出しても頼みたい　１人
夏の間草ぼうぼう　１人

除　雪
自分でできる　１０人、庭、かどの雪は業者に頼んだ（２万円ほどかかった）　１人
近くの人に援助してもらう、手伝ってもらえるなら　１人
手伝ってほしい　１人

その他
将来、施設入所を考えているが、どのような手続きが必要か。
道路愛護に出るのが大変。趣味の盆栽の始末と軽トラックの処分。

2、何かお手伝いしてもらいたいことはありますか。

・除雪　2人

・今はほぼできている生活も無理な事が出てくる。
その時の支援があればうれしい。　1人

・ヘルパーで間に合っている。　2人

3、何かやってみたいことはありますか？

・針仕事（手芸）は好きだったが視力が落ちてきてできない。

・身の回りの生活全般を自分でやりたい。

・健康であったら農作業全般を自力でやりたい。

・区のほうで何かあれば参加したい。

・農作業で精一杯。余裕がない。

・筋力づくり教室に通っている。

4、楽しいと思うことはどんなことですか。

・知人が来て茶飲み話や泊まってくれる人がいること。

・カラオケ、同級生が集まること。

・自分で作った野菜などで料理するとき。

・来る人の顔をみながら話をするのが一番の楽しみ。

・娘が来るのが楽しみ（以前は2週間に1回が今は月に1度に遠のいている）

・ひだまり荘でみんなと会話できること。

・ひだまり荘を利用し、入浴、会話。

・旅行、食事を作ること。

・親しい友人、知人とお茶のみ話。

・編み物とか野菜作りなど自分の趣味が楽しい。

・テレビ鑑賞が楽しみ

富田地区における環境資源再生の取り組み
―中山間地域直接支払いから夢づくり協議会へ―

はじめに
1. メンバーについて
2. これまでの経緯
(1) 菅生舘の歴史
(2) 菅生舘整備作業の計画
(3) 大清水の整備
おわりに

はじめに

里山公園整備事業部には「ないものねだりよりもあるもの生かし」の考え方が生きている。富田地区には、菅生舘という昔は桜の名所になっていた舘山と、きれいな水がたくさん湧き出る大清水という場所がある。どちらも、歴史を持っていて人々に昔から親しまれている。里山公園整備事業部は歴史を持った自然環境を親しみやすい場所に整備して後世に伝えていこうとしている。ここでは主として里山公園整備事業部会の矢吹勝美さんからうかがったお話をもとにまとめていく。

1. メンバーについて

里山公園整備事業部のメンバーは６名で、全員男性で構成されている。部会長の矢吹勝美さんは農業委員経験者、他にも評議員経験者がいる。整備の対象である菅生舘、大清水は地区の共有地ではなく、私有地である。整備のために重機や人が入ることもあり、メンバーには菅生舘の地権者３名に参加してもらい協力をお願いしている。地権者の中には地権を有し､別の土地に住まいを構えている状態だったが戻ってきたという方もいるそうだ。

2. これまでの経緯

現在は夢づくり協議会で里山整備事業を行っているが、整備には中山間地域直接支払いの事業も関わっている。中山間地域直接支払いの農地整備の事業は、農地組合単位で行われ、富田地区には中沢、鍬木田、二反田、前沼の４つの農地組合がある。その中でも舘山のある地区は二反田農地組合に属している。農地組合でも階段を設置したり、花を植えたりはしてきた。けれども、農地組合は地区単位での事業である。道路を作ったり、水路を作ったりと、他にも取り組まなければならない事業をいろいろ抱えている。そこで、資金

の関係できめ細かい整備をしたり、大きなものをつくったりはできない状態だった。そのため、富田区全体で「夢づくり協議会」に主力を移す形となり事業がスタートした。

3. 整備事業の進行状況

(1) 菅生舘の歴史

菅生舘の近くには古くから有名な薬師堂がある。菅生舘には養蚕の神様を祀る石があり、その薬師堂や石にお参りに来る人がよく寄っていた。また、斜面には桜の木があって昔はその咲き方で健康や豊作などを占っていたという。昔は見晴らしが良かったのと、青年会が盛んだったので、青年会の方々が花見や焼肉、酒盛りなどレジャーに訪れていたのだそうだ。当時は集落センターが無く、菅生舘がいちばん人の集まりやすい場所となっていたという。だが、雑木が茂ってきたことによって景観が悪くなってしまい、時代の流れと共に利用されなくなった。景観の改善を目標として整備事業が行われることとなった。

(2) 菅生舘整備作業の計画

部会では夢づくり協議会『水源の里　富田地区再生事業』計画書で、「菅生舘を地区民のシンボルとして整備し、花木を栽培して花や紅葉が楽しめるようにする。大清水周辺を憩いの場に整備する。」という目標を掲げた。

部会はまず雑木のひどいものは伐採し、景観を保つのに良い花を咲かせる雑木は残すという方針で作業をすることになった。しかし、雑木が太くなりすぎて伐採の専門家でも大きな機械ないとできなくなってしまった。大きな機械を持っている、大手の炭屋さんにお願いすることになった。桜の木がかなり古いので専門家に診てもらい症状に応じて治療しようという考えも部会は持っている。

部会では、雑木の手入れについては、108 戸中約 100 戸の方は作業に参加してもらえるのではないかと見込んでいる。年に何回行うかは樹木の状況によるが、1 回につき 30 戸ずつの参加があれば十分な作業を行えるだろうという考えのもと計画を立てている。部会長の矢吹さんは、地元の方はもちろん、通行人、都会へ移住していった人たちがすばらしい景観になったと感心するよう、ちょっと足を止めて見てみようかという気持ちになるような環境にしたいと述べていた。

計画立案当時は手すりのついた階段も整備しようという計画になっていたが、部会員が実際に現場に行ってみたところ、草が生えてしまうと隠れてステップが見えなくなってしまいそうだということがわかった。そこを整備することは止めて危険を知らせる立て看板を作ろうということになった。代わりに背後の農地には車が出入りしている様子もあり、車での進入もしやすそうだということがわかったので、そちら側に道路を整備した方がいいのではないかと検討している。また、周辺の農地では鮫川名物、「まめで達者な村づくり」に一役買っている大豆が栽培されているところもあり、そこでは獣害に悩まされていると

いう。菅生舘を整備して出入りする人が増えることによって、被害が減るのではないかという見方もしている。

(3) 大清水の整備

大清水は読んで字のごとく、きれいな水がたくさん湧き出る。大清水は、棚倉と鮫川を繋ぐ道路が通っている鍬木田地区にある。村営水を汲んでいる場所の近くにあり、棚倉町から町営水道に活用したいと申し出があった程、水がきれいだ。結局水は命に関わる財産だということから活用のための土地改良はなされていない。これはどうにか使い道も考えないともったいないという考えから今回の話が持ち上がった。話し合った結果、菅生舘と大清水、２箇所の整備をすることになって、作業がどっちつかずのまま中途半端に終わってしまうことが懸念されるので、部会ではまず菅生舘の整備が終わってから大清水の整備をしようということになっている。矢吹部会長は、別の土地から水を汲みに来ている人を見かけた経験から、東京で効かなかった薬がここの水と一緒に飲んだら効果が出たなんて話が聞けるようになればいいなという夢を話してくれた。皆で夢を実現するという「夢づくり協議会」の意義がここにも現れているなと感じた。

おわりに

インタビューでは「水は命に関わる財産」という言葉が印象に残った。農業で栄えてきたこの土地には、水を大切にする心が沁みこんでいるのであろう。蛇口を捻れば水が出る、特に気に止めることなく使う。という便利な生活に慣れすぎている。水は飲むだけでなく、生活のあらゆる部分に関わっているし、食べものを育てるのにも必要不可欠だということを頭ではわかっていても、肌で感じる機会は少ない。矢吹さんの「水は命に関わる財産」という言葉に、水のありがたみを改めて気づかされた。

里山公園整備事業部で整備しようとしている土地は歴史があるだけではなく、憩いの場でもあった。整備することで、環境資源を再生するだけでなく、住民の憩いの場として再び機能することにも繋がって欲しい。子どもと大人とお年寄りとみんなが集まって景観を楽しみ、自分たちの住む土地を愛せるような体験ができる場所になってもらえればと願う。

中沢集落における地域活性化の取り組み
—梅加工とめん羊組合—

はじめに
１．特産品づくりとしての梅加工について
（１）メンバー紹介と特産品開発のきっかけ
（２）協議会としての活動実績について
１）事業が決定してからの心境と今までの活動
（２）これからの課題と見通し
（３）将来への展望・意気込み
２．中沢集落で行われてきためん羊飼育について
（１）中沢集落めん羊組合について
１）めん羊組合ができるまで
２）めん羊組合ができてから
３）めん羊組合が中沢に与えたもの
（２）めん羊組合の集大成—うまいもの祭りの様子—
１）参加を決意するまで
２）参加決定—当日の様子—
（３）課題と見通し
（４）将来への展望・意気込み
３．考察
おわりに

はじめに

夢づくり協議会の特産品開発部会部会長の円谷次男さんは、富田地区中沢集落の出身である。中沢集落は、協議会の設立前からめん羊組合を組織し、独自の地域おこしを行ってきた、とてもパワフルな集落である。円谷さんは中沢集落での活動経験を生かして、夢づくり協議会における加工品作りの取組みを思いついた。本稿ではこのような２つの事業を生み出す元になった中沢集落について、活動内容を振り返りながらまとめてみることとしたい。

１．特産品づくりとしての梅加工について

（１）メンバー紹介と特産品開発へのきっかけ

夢づくり協議会特産品開発事業部に所属しているのは６名の男性たちである。集落別にみると、中沢集落が２人・彦次郎集落が２人・前沼集落と反田集落が１人ずつという構成になっている。また、村議会の議員や評議員をしている人・農事組合に所属している人など役職も多岐にわたっているようだ。

そもそもなぜ、富田地区の夢づくり協議会で、特産品として梅に注目することになったのだろうか。特産品開発事業部部会長の円谷次男さんにお話を伺った。

第１の理由としては、富田地区における活動の中で「無いもの探し」より「あるもの生かし」の概念が協議会全体に行き渡っていたからだという。特に中沢集落には昔から梅の木がたくさん植えてあった。その梅を対象にすることで、植樹や手入れ、土地提供など集落に住むたくさんの人が関われる規模のプロジェクト展開が可能になるのではないかと円谷さんがアイディアを出したところ、協議会でも満場一致で決定したそうだ。

第２の理由は、梅が共同生活のカギの役割を果たしていたことが挙げられている。中沢集落では昔から梅干しや梅漬けはほとんどの家庭で作っているので、作り方の勉強などで交流のきっかけにもなっている。そのため、梅の不作の年があれば隣近所で梅のやり取りをするというように、助け合って暮らす習慣ができていたそうだ。また、日常的に梅の加工品を食べてきたことで血液がサラサラになったり、手先の関節が広がるようになった、熱中症などの症状が改善したなどの確かな実感があるそうだ。この点は販売形式などを工夫することで､付加価値を付けて売り出すのにも有力であると考えられる。

そして第３の理由は、経済的な状況の改善である。今まで無償労働として各家庭で担われてきた梅加工を事業化することで、地域の行き詰まりを打開する力にしていきたいとの考えが強くある。最終的な目的は、富田を梅の産地としてＰＲしつつ、住民の所得向上と地域経済の活性化を図ることである。以上の理由から、協議会の特産品開発は梅を中心として活動していくことになった。

（２）協議会としての活動実績について

当初は、特産品としての梅の加工品開発だけでなく観光梅園づくりや梅の木オーナー制度も考えられていた。ただ現在では観光梅園は候補地の選定中なので、ここでは主に特産品開発について述べることにする。

現在富田地区全体では 800 本程度の実のなる梅の木がある。協議会としての方向性が決定した段階で、さらに新しく梅の木を植樹することになった。中沢集落・富田地区合わせて 10 戸ほどの家で梅の木を新しく買って植えたという。もう１～２年もすれば、新しい木からも 30～40ｋｇ程度の実が収穫できるようになるとのことだった。協議会で梅の加工品開発をすることになったときに、参考にしたのが中沢集落の梅漬けである。中沢集落では特に日常生活と梅のつながりが深く、家ごとに違う味の梅加工品を作ってきたそうだ。具体的な内容を、部会長の妻で中沢集落在住の円谷八重子さんに伺った。

１）事業が決定してからの心境と今までの活動

はじめに特産品開発の話が回って来たときは、正直楽しみよりも不安の方が大きかったという。なぜなら、実際に加工・販売などの役割を担う女性たちの声をほとんど反映することなく計画が決定し、スタートしてしまったからだ。「これからはもっと話し合いの席に女性も呼んで、意見を取り入れるようにしてほしい」と八重子さんは語っていた。それでも、決まったからには富田区のためにもいいものを作っていきたいと、具体的に行動を開始することになった。

一言に梅の加工品といっても様々な種類がある。各家庭で作られているものは、梅漬けをひとつ取っても使う梅や井戸水の違い、漬け方によって味付けや色・硬さなど、その家ごとの味が出てくる。ほかにも砂糖梅や梅干・カリカリ梅など、加工方法もたくさんある。そこでまずは、お客さんが喜んでくれる商品はどんな形態で売られているのかを確かめるために、視察に出掛けることになった。視察は特産品開発部メンバーと中沢集落のめん羊組合メンバーで計２回行ったそうだ。道の駅などで梅の加工品を売り出しているところを実際に見て来たのだが、それぞれに大きな収穫があったという。加工所は店舗のすぐ裏手にあったのだが、さすがに企業秘密ということで見学はさせてもらえなかった。それでも、そこで買って食べた砂糖梅がとても美味しく、自分たちでもこんな加工品を作って売ってみたいと考えるようになった。また、そこの梅漬けは全て種が抜いてあったのだが、自分たちが作る時は手間がかかることを考えて種入りのままにしたらどうかなどのアイディアもたくさん出てきた。

視察で学んだことを踏まえつつ、集落の中でも人気があった八重子さんの家で作る梅漬けと、この砂糖梅を商品化の候補として考えるようになった。また八重子さんたちは梅の木を植えていない家庭でも、簡単に作れるシソジュースをぜひ商品化したいという。しかしこれは、各家の井戸水を使って作っていたものなので保健所の許可を取るまでが大変だろうと予想している。因みに、これらはあくまで現段階で出ているアイディアにすぎない。もしも実際に加工を始めるころにより良いアイディアが出てきたら、積極的に取り入れていきたいと考えているそうだ。

（２）これからの課題と見通し

八重子さんは、加工を始めるための物的・人材的状況と課題について以下のように述べている。まず原料となる梅の実だが、現段階ではまだ収穫できるまでにはなっていない。協議会の活動が始まってから１０戸ほどで新しく梅の木を植えたのだが、その実がとれるようになってから加工活動を開始する予定でいるそうだ。そのため、実質的な加工品作りはあと１～２年してからになるだろうと話していた。

２つ目には加工品を作る加工所についてである。これもまだ建設までには至っていな

い。ただ、今のところ部会長が村長に掛け合って、村の加工所を借りて加工活動ができないかということを話し合っているようだ。元給食センター施設を改築した村の加工所では、手まめ館で販売する商品などを作っている。ここはもちろん保健所の許可済みなので、将来ここを利用することが出来るようになれば、施設の建設費削減やシソジュースなどの商品化候補の幅も広がるのではないかと期待しているという。

３つ目には活動を担うメンバーについてである。先に述べたように事業の開始自体が先に決定してしまったので、現時点では中沢集落の女性同士でさえ、誰が協力してくれるのかがわからない状況にあるという。八重子さんの周りの人は日常的に顔見知りの間柄だが、「加工品事業についてどう思う？」と改めて聞くことはなかなかできていないそうだ。今のところ加工品作りは、中沢の女性をはじめ富田区全体から梅の木を新しく植えた家の奥さんと、新たに梅加工をやってみたい女性をメンバーとして考えているという。梅の加工品を商品として安定的に供給するには、たくさんの人手が必要になる。加工販売の段階だけでなく、梅の木の手入れや収穫なども含めて、協力してくれる人たちをいかに確保、把握していくかや、活動をどうやって地区全体に広げていくかなどが課題として捉えれている。

（３）将来への展望・意気込み

不安が多い中で始まった加工品開発事業だが、研修などで刺激を受けながら少しずつ楽しみも見えてきたと八重子さんは語る。せっかく作るのだから、みんなに喜んでもらえる商品を作りたいという八重子さんの表情はとても明るかった。中沢のビックイベントである「うまいもの祭り」もやっと終わったことだし、これからはもっと活発に話し合いの機会を設けることができるだろう。そこから計画を煮詰めて、徐々に具体化していきたいと話していた。

１．　中沢集落で行われてきためん羊飼育について

（１）　中沢集落めん羊組合について

中沢集落では、富田区で夢づくり協議会の活動が開始されるよりも前から独自の活動を行ってきた。集落には１７世帯の住民が住んでいるが、その全員がめん羊組合に加入している。活動内容としては、めん羊の世話や草刈りなどの共同作業がある。以下、組合の成り立ちなどを順を追って述べていくことにする。

１）めん羊組合ができるまで

中沢集落のめん羊組合は、現在中山間地域直接支払の交付金を受けて活動している。結成してから今年で４年目になるこの組合は、以前中心産業だったこんにゃく産業の衰退に伴い、中沢集落が寂れてきたことをきっかけに結成されたそうだ。この頃から後継者不足

と、主となる収入源が衰退したことで中沢集落の経済状況はかなり厳しいものだったという。部落長だった円谷さんは、このまま何も対策を打たないでいては状況がより悪化し、取り返しのつかないことになるのではないかという不安を抱いていた。そこでどうにか遊休農地を活用して地域の活性化と経済収入を上げることはできないだろうかと考えるようになったそうだ。

そこで思い付いたのがめん羊の飼育と精肉・販売である。なぜ活動の中心をめん羊の飼育にしたかということには、理由が２つあったという。まず、放牧で育てていても何かに襲われる危険性はほぼないだろうということである。次に、中沢では以前毛を取るための羊を飼っていた家が多かったことから、何とかなるのではないだろうかという考えがあった。円谷さんとしては、そこからあがる収入を中沢のために使えればという目標を掲げていた。

しかし初めのうちは、中沢集落の人全員に反対されたという。まずは集落全員に理解をしてもらうために男性陣を引き連れて、小岩井牧場や葛巻牧場などの多くの先進地に泊りがけで研修に出かけて行った。しかし、研修先の反応はどちらも芳しいものではなかったという。すなわち、「もしもこれから新規でめん羊の飼育を始めようとしているのなら、経営的にはほとんど儲からないから止めておきなさい」ということを言われたそうだ。それでも円谷さんが粘り強く話し合いを続けるうちに、少しずつ拒絶反応は和らいできたようで、羊小屋の提供を申し出る人も出てきた。このように集落ぐるみでの取組みを前提として話し合いができるようになるまでには、丸２年もかかったという。

ところが、このころに一大事件が起こった。いまだに集落内では計画を決定するまでには至っていない状況にも関わらず、取材陣や広報活動の関係者が押しかけてきた。これは手違いで先に申請書を出してしまったことによるものだ。円谷さんは緊急の総会を開き、組合全員で今後の方針を話し合うことになった。そのときめん羊を飼うことに賛成したのは、円谷さんを含めて１７人中２人だけだった。反対派の人たちからは口々にその申請書を返して来いと言われたそうだ。円谷さんは何も活動をしないままで中沢がさびれていくのが怖かったし、話し合いがうまくいかない悔しさも積もり総会の席で手ぬぐいをかぶって泣いていたという。それでもどうしてもあきらめ切れなかった円谷さんは、その場にいた組合の人たちに向かって、「もしこの申請書を返したら、この先村に対して何を要求しても、自分たちの声を聞いてくれなくなるだろう。だから今後一切、中沢集落は村の言うことは聞かないし、完全に独立することにする。その条件を飲んでくれるのなら、この申請書を返して、計画をなかったことにしてくる」と語りかけた。周りの人は押し黙り、朝の４時まで話し合いの場は続いたそうだ。最終的には、賛成の人は２人から４人に増えた。そして、反対派の人たちも「もうお前ら４人で勝手にやれ」という意見に落ち着いた。こうしてどうにか１７人を説き伏せると、その場でさっそく村長の自宅に電話をかけた。後日村長に中沢集落に来てもらうように約束を取り付け、改めてめん羊飼育事業をスタート

させるということを告げたという。

しかし、当時中沢では自由に使える資金はほとんどない状態であった。当初活動資金について農林事務所に相談したところ､組合を作れば集落営農の補助金 10 万円が利用できるということを知った。それ以外の財源が全くないため、活動の全てが無報酬・自己負担であることを納得してもらった上で、中沢集落の全 17 戸が加入しためん羊組合を結成、正式な組合活動が始まることになった。この時点で村からの財政的な支援は全く出なかったが、将来活動が成功したら考えてもいいという約束を村長と取り付けることが出来た。

２）めん羊組合が出来てから

資金の調達には苦労したのだが、ひとまず子羊を飼ってくる運びとなった。円谷さんたちは、最初はめん羊１頭だけを買ってくる予定だった。しかしその日の朝､「足りないお金はみんなで集めるから、どうかもう１頭買ってきてください」と言ってやってきた人がいたそうだ。その心意気に胸を打たれた円谷さんは、若干予算を立て替えることにして、本宮で年１度しか行われないせりに出掛けて行った。立て替えた費用は、これから収入があったときに少しずつ返してもらえばいいと思っていた。当時はめん羊の価格がとても高く、１頭だけでも 86000 円はしたという。実際に羊を買って来たはいいものの、２頭ともメスだったりえさのやり方がわからなかったりと、最初のうちはしばしば混乱が起きていた。

しかし活動２年目ともなると、ケニアやインドネシアなどから視察が来るほどまでに活動が発展していった。そして、中沢のがんばりを認めた村長から、オスのめん羊１頭の寄付を受けた。また、農林畜産課の役場職員を相談役として配置するなどの協力も得ることができた。今でもその相談役との連携は続いており、中沢の総会を開く前に相談役と円谷さんが話し合い、議論したいことを整理するのだそうだ。ちなみに、日中は役場も集落の人たちも忙しいので、話し合いはすべて円谷さん宅で夜などに行われるという。

実際に羊を飼い始めてからは出費ばかりなので、ずっと赤字経営が続いていた。しかしはじめの羊たちが子供を産んだり、途中で育てられなくなったという人から無償で羊を譲り受けたりしているうちに、少しずつ羊の数も増えてきた。そのためやっと羊肉として販売できる状態になり、今年鮫川村で開催される「うまいもの祭り」（詳細は下記）に参加する計画が出てきた。ここで得た収益はめん羊組合の初めての収入であり、運営に使えるようになる。今後は組合として正常な状態になるそうだ。

３）めん羊組合が中沢に与えたもの

めん羊組合は中沢集落に暮らす１７戸すべてが加入している団体である。その中でも特に中心となって活動を行っているのは、６人の男性とその妻たちである。毎日羊の世話をするのも、自分たちの仕事や家事の合間にこなさなければならないため、コアメンバーはいつも多忙な生活をしているという。初めは羊を飼うこと自体に反対をしていた人も多く

いたのだが、実際に世話をして身近に触れているうちにだんだんと愛着が出てきたらしい。そして何よりも、生き物の世話をするということは半端な気持ちで放り出すことができない。その思いが中沢の人たちの団結力を高めるきっかけになっているようだ。そこには、普段羊の世話に携わらない人たちも含まれている。なにも手伝いなどはできないけれど、羊の元気がないと聞けば心配だし、赤ちゃんができたと聞けば自分のことのようにうれしいという人が増えている。他にも会議の時に差し入れを持ってくるようになったり、「うまいもの祭り」の準備を快く手伝ってくれるようになったという。集落全体で羊を飼うということで、人のつながりがより濃密なものになったという思わぬ効果が生まれた。

（２）　めん羊組合の集大成―うまいもの祭りの様子―

１）参加を決意するまで

活動を始めてから４年目、羊肉販売を通して、中沢のめん羊をＰＲする機会がやってきた。2009 年 10 月 18 日、村で開催する「うまいもの祭り」に中沢集落も参加することになったのだ。円谷さんたちにとっても初めての試みだったが、「自分たちの集落では、今こんなことをしていますよ」と多くの人に知ってもらえるチャンスであると考え、参加を決意した。

まず円谷さんは、どのような形式で羊肉を提供すればより多くの付加価値をつけられるのだろうかと考えた。初めに思いついたのはスペアリブのように、骨付き肉で出す方法だった。しかし、その形状に肉を切る専用の機械は日本では手に入らないということが判明した。がっかりした円谷さんだが、生ラムに変更した後もなかなかあきらめられずに他の方法を探し続けた。そしてとある本を読んでいた時に「ミルクラム」という言葉を見つけた。その単語の意味を調べていくうちに、数年前の苦い記憶を引きずりだした。それは以前、牧場に研修に出かけて行った時のことだった。「サテーラムは別名ミルクラムとも言い、生後８か月以内の羊の肉を指す。確かに肉質は柔らかいけれど、もしこれからめん羊飼育をするのなら採算が取れなくなるから絶対やらない方がいい」と言われたものだった。

円谷さんはあのとき言われたことを思い出して組合で提案したのだが、またもや総反対の嵐にあった。そんなことは今まで誰もやったことがない、今の羊はこんなに小さくてぬいぐるみみたいなのに可哀想など、ほとんどの人たちから批判を受けた。それでも円谷さんをはじめとした役員６名は、最後まで折れなかった。「もしも売れなかったら全額３０万円の費用は自分たちが自腹で支払うから、ミルクラムでやらせてほしい」。この言葉で長引いていた話し合いも区切りがつき、やっとミルクラムで売り出すという方針が承認された。

２）参加決定―当日の様子―

「うまいもの祭り」のめん羊は 45～60ｋｇの３頭で、いずれも生後７カ月ほどしかたっ

ていなかった。可食部分は54ｋｇ。肉を買ったらすぐに食べられるように、ミルクラム300ｇとカット野菜と手作りの「タレ」のセットで1500円という値段をつけた。セット野菜と「タレ」は八重子さんの手作りである。これはあくまで肉を売るためのサービスなので、価格の中には含まれていなかったという。

「うまいもの祭り」当日はミルクラム170パックが出品された。イベント当日、めん羊組合ではめん羊触れ合いコーナーと肉販売コーナーを出展した。めん羊組合から参加した全員が『人とのつながりで売る』ということを心掛けながら販売をしていたという。今回の第一目標は、自分たちの活動を多くの人に知ってもらうことだった。売り上げなどは二の次で、知っている人が来たら今までの取り組みを丁寧に説明して、納得ずくで買ってもらう。このように最後まで人の心に訴えかけた結果、用意した170パックはすべて完売、大成功でうまいもの祭りは終了した。

ミルクラムの売り上げ額だけでも25万円は超え、八重子さんたちが一緒に売った生モツも大好評だったそうだ。全ての売り上げ額から村からの補償金を引いたものが、めん羊組合の収入となる。そのお金は来年のえさ代にしたり、活動費用にしていきたいと考えているそうだ。また、ぜひ来年も「うまいもの祭り」で活動をしていきたいと村長に要望を出したという。

（３）課題と見通し

現在めん羊組合において課題として考えられているのは、将来的に労働力不足の恐れがあるということだ。現在、めん羊の主な世話はコアメンバーの６戸の夫婦で担われている。生き物の世話をすることは、継続的に命に責任を持つということでもある。そのため、日々のえさやりや草刈り後の運搬など、体力がいる作業も多いことが分かる。

話をうかがう中で、組合全員で育てている羊だからこそ、ぜひ次の世代にも引き継いでいってほしいという気持ちが強く感じられた。ただ、後継者世代にとっては自分の仕事や家庭で精いっぱいで、地域活動に参加できる余裕があまりないというのが現状である。親心からか、休みの日くらいゆっくりさせたくてあえて声をかけないという話も聞いた。このようなすれ違いもあり、このまま今の世代だけで活動が終わってしまうのではないかという不安をそれぞれが語っていた。この現状を踏まえながら、将来的にメンバーが安定して世話できなくなったらどうするかについて少しずつ考えていくことが必要である。しかし、その話し合いもあまり進んでいないというのが円谷さんの実感だそうだ。

（４）将来への展望・意気込み

円谷さんは組合長としての任期が満了してからも、中沢のめん羊にはこれからもずっと関わって行きたいと思っている。めん羊を飼いたいという構想を持ってから本当に色々なことがあったが、今ではめん羊を中心にして中沢集落の団結力がぐんと上がったように感

じているそうだ。昨年には、初めて組合の正式な収入が手に入った。この一つの区切りを通して、より発展していくための目標が各人にも見えてきたという。中沢に活気と経済力を取り戻すと言う当初の目標は、いま第一歩を踏みだしたところだといえる。

３．考察

特産品部会の梅加工もめん羊組合の活動も、これからまだまだ発展の余地がありそうだ。前者については、まずは近いうちに、参加者全員での顔合わせの機会を設ける必要性があることを強く感じた。今現在の状況をみんなで共有し、少しずつ今後の計画を検討していくという段階が必要である。八重子さんの言葉にもあったように、企画を考えた開発事業部の役員だけでなく、木の手入れや収穫に関わる人から加工作業を担う人などの意見も聞いて、全体の動きに取り入れていく姿勢は重要である。また加工所の件についても、新しく組合や個人で設置して事業部に貸し出すという以前の計画よりも、村の加工所を利用させてもらうほうがとても効率的だと感じた。いずれにせよ、関係者全員でじっくり話し合いつつ、梅の収穫時期までに全体の詳細な計画を完成させて、スムーズに活動に移れるように準備することが必要になってくる。

後者については、やっと一つの区切りがついた時期であるといえよう。来年以降に組合として「うまいもの祭り」にどうかかわっていくのかや、いかに普段の活動から収入を安定させていくかなど、新しく見えてきた課題もたくさんあったと思う。そのためにも今のような団結力とモチベーションを維持したまま、これからの活動を発展させていく工夫が必要になるだろう。

梅加工・めん羊飼育事業の共通の懸念としては、「自分たちの次の世代になった時に、活動がきちんと続いていくだろうか」という漠然とした不安が存在しているということだ。富田地区で地域活動の中心として活動しているのは、現在６０代以上の方が多い。この年代の女性だと特に、家庭の畑仕事や食事の準備、果ては孫の子守なども頼まれる機会が多いという。また男性であっても忙しさに大きな差はないし、体力的に活発に動きにくいということは男女共通の悩みらしい。そして、聞き取りの中で自分の子供たち・ひいては自分たちよりも下の世代の人たちに対する気持ちもうかがうことができた。まずは自分たちが安定した生活をしていくためにも、仕事を優先していてほしいという。先に述べたように休みの日だからこそ、家の仕事の手伝いや地域活動参加などを強制させたくはないという声もある。

しかしお話を伺う限りでは、後継者世代の息子・娘たちとしても、まったく活動に関心がないというわけではないようだ。単に平日などは仕事で継続的な活動時間が確保しづらいだけで、実家の農繁期などには手伝いに顔を出すこども世代は意外と多いことが分かる。そこでこの世代間のつながりを生かして、徐々に若い世代との接点を増やしていけばいいのではないだろうかと考えた。例えば休日に羊とふれあえるスペースを作って小さいこど

もたちを介した交流の場を設けるとか、一人一品ずつ手作りの料理を持ち寄り、おしゃべりしながらみんなでご飯を食べる日を作るとか、取り組み方はたくさんあると思う。まずは大人も子どももワクワクできる経験を積み重ねることで、少しずつ梅加工とめん羊組合の活動に目を向けてもらうことが大切である。そうなれば後継者問題にも不安だらけだとは感じなくなるかもしれない。

おわりに

中沢集落において地域活動をしている人は６０代以上の方が多いと述べたが、調査を続けていく中でそれぞれ本当に若々しい人たちばかりなので驚いた。年齢に関係なく、自分たちの住む地域を何とかよくしていきたいという気持ちと、その活動が少しずつでも日々の生活に現れてきているという実感がプラスの影響を与えているのではないだろうかと感じた。今回は中沢集落における梅とめん羊の取り組みについてまとめてきたのだが、どちらも身の回りにあるいいところを見つけ、生かそうとする取り組みであった。そこには従来からの人と人のつながりも含まれている。信頼関係の中からさまざまな意見を出し合い、互いに尊重しあう。濃密な話し合いができたり一つの目標に向けてまとまりやすいというのは、構成員が少ない集落だからこその強みだとも考えられる。この点を意識しながら、これからも柔軟に大胆に活動を進めていってほしいと思う。

富田地区における交流活動

－新たな気づきとつながり－

はじめに
1．交流事業部の活動
2．富田地区における個別的な取り組み－村外との活発な交流
（1)自然体験による交流活動
（2)多岐に渡る交流活動
3．見えてくる富田の良さ－民泊を通じて
（1)暮らし
（2)人々のあたたかさ
（3)地区への思い
おわりに

はじめに

交流という言葉は、双方向からの流れ、あるいは異なる性質の人やものが入り交じるという意味を持つ。ある地域ともう一方の地域の間でものや人が両方から行き来することによって互いの地域の経済は活性化し、さまざまな影響を受けたり、新たな情報を得るきっかけともなったりする。そして人の交流により、以前とは違ったものの見方や考え方、また慣れ親しんでいるものとは異なる生活手段を知ることが可能となる。それによって自らの地域の良さに気づいたり、相手の良いところを参考に新たな工夫を取り入れたりするなど、互いにさらに輝く地域への可能性を高めることが出来る。

農村地域では、若者が都会へ出て行ってしまうことによる人口流出などが原因で農業従事者の高齢化が進み、地域の次の世代の担い手不足が不安視されている。そこで地域の活性化が全国の農村にとって課題となり、それぞれの自治体が地域のいいところを全国に発信したりするなど様々な方法で地域の活性化を目指している。国での政策としては、農林水産省では全国へ魅力ある農山漁村の情報を発信することを通じての国民の農山漁村への理解やグリーン・ツーリズム等の観光促進を目指し、交流に関わる様々な取り組みを行っている。たとえば、文部科学省、総務省と連携して取り組んでいる小学校における農山漁村での長期宿泊体験活動を推進する「子ども農山漁村プロジェクト」や、農山漁村の美しい景観等の地域資源を活用し活性化や都市農村交流等に取り組んでいる団体を表彰する「美の里づくりコンクール」などである。

国や自治体での様々な取り組みの一方で人々の間では、都市にない貴重な体験空間のある農山村への憧れや関心が高まっている。富田地区ではその空間を交流活動の場として活かす取り組みに力を入れている。私たち鮫川調査グループのように、福島大、東京農大、大妻女子大、東京農

工大など大学生との交流も盛んである。やはりこういった人的ネットワークを利用して地域資源を発掘し、磨きをかけることや、地域に自信や誇りを持つことによる人材育成への希望を持っているそうである。

ここでは、第２回目の調査（８月）及び第３回目の調査（10月）の際に体験させていただいた民泊、それらの取り組みの中心となっている夢づくり協議会の交流事業部の活動や個別的に交流活動を行っている人々に焦点をあてていきたい。まず交流事業部の活動や個別的な交流活動に関して、主として鈴木一さんや大平啓子さんから伺ったお話をもとにまとめていく。そして、今回民泊をさせていただいて私たち学生が気づいたことについて述べていく。

１. 交流事業部の活動

交流事業部に所属しているメンバーは現在９人で、夫婦で参加している人が多く、既に交流活動を行っている人や交流に関心を持つ人たちが集まっている。積極的に交流活動に取り組んでいる鈴木一さん（部会長）や、ホタルの里づくり事業に参加している栗原純一さん（副部会長）、前区長の大平忠一さん、事業に参加するようになってから新たな発見が多いと話していた添田サチエさんなどが交流事業部に所属しており、中沢集落の方も参加しているそうである。

交流事業部では、富田地区の自然、歴史遺産、伝統文化、食、生活文化等を活かした、学び、遊び、食が楽しめる体験交流型の観光地を目指している。そうした「体験型」の交流を行い、富田地区以外の人々との関わりの中で住民が元気になり、それによって地区が活性化することが重要な目的である。部会長の鈴木一さんは、交流事業部の目指す交流は相互に行き来する形のものではなく、訪れてきた人たちを地区の方々が出迎える中で体験を伴って成り立つものであり、「体験型」交流は広く使われている「観光」という言葉の持つニュアンスとは違う意味を持っていると言う。もともと鮫川村に来る人たちというのは、他の観光地に飽きたり肌に合わなかったりする人たちであり、一般の観光地のような楽しみを求めているわけではないので、その人たちに「観光地」として対応することは意味を成さない。鮫川村について何も知らずに来る人はなく、何らかの目的を持ってやってくるので、体験もバラエティに富んでいて、少し苦労して達成感を得られるような農業体験、自然体験が多い。こういった交流の目的で富田地区に来る人を増やしたいという希望はもちろんあるが、増やしたいというより春夏秋冬それぞれの季節に訪れてみたいと思えるような形で、特定の季節に人気が集中しないようにしたいというのが一番の希望のようである。都会に住む人たちは農山村の食に関心を持っているので、それを強調していくのが一番いいと考えているそうだ。

活動の具体的な内容としては「里山ふれあい体験の森」の整備、里山ガイド・語り部育成、見所マップの作成、農家民泊受け入れ農家の育成が今後の活動の予定となっている。「里山ふれあい体験の森」については、私たちも 10 月の第３回目の調査の際に前区長大平忠一さんのガイドのもと見学させていただいた。普段見られない植物などについても説明していただきながら 30 分ほど森の小道を歩いてみて、外側から見ているだけでは分からない自然に出会えてとても新鮮だった。さらに説明をしていただくことで、ただ歩いただけでは気づかないであろうことにも気づけるので、ガイドの役割は重要なのだと感じた。交流という意味でも、歩きながらの他愛のない会

話や訪れてきた人たちに地域の自然を紹介することは地域を知ってもらうことの第一歩と言えるだろう。また、「語り部育成」が活動内容に挙がっているが、ここで言う「語り部」とはその言葉から真っ先に連想される民話の語り部ではなく、「昭和の語り部」つまり昔ながらの暮らしを語れる人材を意味している。育成しようとするにも、たくさんの知識の中から話題を引き出して語ることが重要であって、いくつか知っていること全てを話すのでは語り部とは言い難い。若い人たちの力も必要となるが、なかなか自分たちの地域に誇りを持って語れる人が少ないのが現状である。そのような点をどう調整するかが課題だと考えられる。

現在は組織として活動していくにあたって調整している段階だが、最初に挙げたように里山の整備、ガイド・語り部育成、マップ作成と活動の幅が広いので、イベントのようなものまではまだ手をつけられない状況であると言う。今後の交流事業による変化としてまず考えられているのは、他の地域から人が入ってくることに対して住民が「慣れる」ことである。実際に鮫川村の他の地区で、人がたくさん入ってくるようになってからそのような状況に対して違和感がなくなり、明らかな変化が現れたという例もあるそうだ。富田地区も交流活動によりそういった変化が現れるだろうと考えられている。

また、事業について見ていくなかで、各事業部の活動の共有の可能性や交通アクセスの不便さの問題などが浮かび上がってくる。前者に関して質問したところ、どのような形になるか詳細は決定していないが、他の部会と協力して活動していく考えを持っているとの回答をしてくださった。現在富田地区ではおよそ 100 戸のうち 30 戸が夢づくり協議会の話し合いに参加しており、普段の総会とは異なった気さくな雰囲気の中で話し合いが出来ているため、協力していきやすい環境のようである。里山ガイド・語り部の育成では講師役で高齢者支援事業部、伝統を生かした交流事業では伝統文化継承事業部というふうに交流事業部は活動の幅が広いだけあって他の部会との活動の共有が考えられる。部会ごとにそれぞれ活動するのではなく、こうして活動を共有することで新たな可能性を見出すことが出来るのではないだろうか。

後者については、「鮫川村は決して交通アクセスは悪くない方であり、仮にアクセスが悪いとしても車を手配するシステムなどは考えておらず、それを克服して来てくれる人がありがたい」と部会長の鈴木一さんは話していた。さらに「道が悪いのもひとつの魅力」である、とも強調していた。快適な道路ばかりが良いわけではないという考えは、私たちにとって衝撃であった。そして相当悪いところは改善されてきていて、数年後には国道 289 号線の開通により状況はかなり変わると予想されている。鮫川村に体験活動を目的として訪れてくる人たちにとっては、目的地までの道のりも楽しみの一つと言えるのかもしれない。

部会長は事業に対する意気込みを以下のように語っている。「交流事業を実施していくにあたってやはりアピールは必要で、口コミが最も強力な方法だと考えている。しかしこの事業はアピールのための事業ではないので、まずは活動することに重点を置いている。富田地区に来たからこそ、実は今の生活も快適で良いところがあるなど、自分の普段の生活が見えたり、新しいことに気づいたりする。逆に富田地区の人々は自分が暮らすところの良さに気づかされて、自分の暮らしに誇りを持てるようになる。互いに気づきをもらえるということが交流の意味であると考えて今後の活動に臨んでいきたい」。アピールよりまずは行動することが重要だと強調する姿から、

地区に自信を持っていて交流事業によって良い効果が現れると確信していることが伺えた。訪れる側が「客」として観光するのではなく体験を通じて交流することで、訪れる側・迎える側が共により多くの気づきを得られると考えられる。

2. 富田地区における個別的な取り組みー村外との活発な交流

富田地区には交流事業部に所属しているか否かに関わらず、自らの興味・関心によって自主的に交流活動をしている方々がいる。ここでは以前から自然体験による交流活動を行っている交流事業部 部会長の鈴木一さんと、交流事業部には所属していないが個人的に多岐に渡る交流活動を行っている大平啓子さんの活動について紹介する。

（1）自然体験による交流活動

交流事業部の部会長である鈴木一さんは夢づくり協議会の設立前から、個人で自然体験や交流活動に積極的に取り組んでいる。ここではその活動について詳しく見ていく。

1）始めたきっかけと現在の活動

鈴木一さんが現在のような活動を始めたのは５～６年前である。活動を始めるきっかけとなったのは、「ほっとはうすさめがわ」周辺の自然観察を 15 年ほど前から頼まれて行っていてもとから興味があったことと、その頃小学生の子どもがいたことであったと言う。

一さん宅の前にある山の中は公園のようになっていて、東京ドーム一つ分ほどの広さを全て自らが管理している。体験活動として特にプログラムを作らずに、来た人たちの反応を見ながらその人たちがどのようなことを希望するか汲み取るような形で実施している。それが可能となるのは、このフィールドがあるからだと一さんは話している。対象は大人、子ども、お年寄りとどのような人が来ても対応できるようにしている。楽しむことを重視してはいるが、単に自然の中を歩いて楽しむだけのようなプログラムからは一歩進んだものを目指している。主に環境のことを取りあげていて、生き物の共生、循環型社会、食の安全、生物の多様性、生き物のふれあいなどについて少し深く学べる、一般の人向けというよりは多少専門的な内容になっているようである。

体験・交流活動への参加者の状況について、一さんは以下のように話している。「訪れてくる人数は季節にはほとんど関係なく、夏が特に多いということもない。きのこの季節に毎年来る人もいれば、春に来る人もいて、人それぞれである。ひとつのことをするために、周辺の草刈などの準備に何日もかかる。あまり多くの人数には対応できず、来る人は自分と話せる程度の人数でなければ、と考えている」。また「出前」事業も行っていて、他の場所へ出向いて 90～100 人を対象とするイベントをしたりもするそうだ。

現在は主に「火のある暮らしの体験塾」というキャッチフレーズのもと活動を行っている。文字通り火を使った体験活動であり、木質バイオマス[1]と呼ばれる樹木の伐採などの際に出る枝など

---

1 林野庁（農林水産省）によれば、「バイオマス」とは、生物資源（bio）の量（mass）を表す言葉であり、「再生可能な、生物由来の有機性資源（化石燃料は除く）」のことであり、なかでも木

を有効利用することも注目すべき点である。木質バイオマス利用は地球温暖化防止など環境の中で重要なことであり、循環型社会の考え方のひとつであると一さんは強調していた。また一さんの体験活動スペースにはピザ焼き体験ができるピザ窯が設置されているが、それを利用して作る石窯ピザも、自分たちで山の整備をして枯れ木を片付けた後その枝をどうするかと考えたときに「薪を燃やして石窯で何か作れば良いのではないか」と発案されたそうである。

2）活動から得られたもの

体験活動には「食」が欠かせないものであり、ピザ焼き体験についても、イタリアがスローフード発祥の国であり日本の食事と似ていることから、スローフードの実践として取り入れていると言う。このピザ焼き体験に関して、一さんは以下のようなことを話している。「自分自身はイタリアに行ったことはないが、実際に来る人たちはよくイタリアに行って本場のピザを食べている人なので、アドバイスをもらいながら作っている。他のところから鮫川村に来る人にもらう情報はやはり大きく、インターネットの情報は不確かであまり信用できないので、直接話を聞いてそれを受け入れられるフレキシブルな心を持っていないといけないといつも感じている」。そして「自分は鮫川の田舎流でやるから、と意地を張っているとその人たちは絶対に来なくなってしまうので、アドバイスは素直に受け入れて、後から田舎流にアレンジするように心がけている」とも加えていた。

体験活動を続けてきた中で発展したこと、あるいは来た人たちから学んだことについて質問したところ、「もちろんたくさんあるけれど、中でも何もしていなければ当然知り合えないような人とも数多く知り合えたという意味で、人脈は大きい」と語っていた。物品や有益な情報をいただいたり、野菜を送ったり、技術的な面でも助けられているらしい。一さんは、交流活動を行うことで精神的に年齢より若々しくいられると考えていて、自分が楽しみながら体験活動に携わっているということは、体験している人に伝わっていると感じていると言う。

3）今後の展望

今後新たにしてみたいことについて伺ったところ、若い人も混ぜて一緒にやってみたいと考えていることも数多くあると答えてくださった。しかし次の世代はもう自然に対する興味が少ないので、この世代で途切れるものはずいぶんあるだろうと言う。交流事業部としての活動が今後本格的になっていく中で地区の若い年齢層の人たちも少しでも自然に対する興味を持つようになれば、後継者に関しても理想的な方向へ近づくような希望が見えてくるのではないかと思う。

地域の交流活動の先駆けとして、一さんは今後の地区の活動の展望についても語っていた。「先行して取り組んでいる他の地域では、子どもたちのみならず視察に来る場合も多い。鮫川村は他の地域へ視察に行っている段階で、組織として動き始まって間もないのでまだ視察を受け入れられる段階にはなっていない。そのレベルに達するまでに鮫川はどんどん実践的なことに取り組んでいけば良いと考えている」。今までのやり方に倣うのではなく、今後どのようなことが必要とな

材からなるバイオマスのことを「木質バイオマス」としている。

るか先を見据えて活動していることが分かる。

以上、鈴木一さんの活動について見てきたが、一さんの活動のスタイルは良い意味で計画を立てない自由なところが特徴であると言える。自宅の前の山をまるごと体験活動の場としているあたり、まさに空間を最大限に活用していると言えるだろう。プログラムを固定化せずに、来た人たちの反応を見て臨機応変に対応できる体験活動は、他ではあまりないだろう。

聞き取りの内容からも、一さんは人一倍自然環境などの鮫川村の魅力を理解していると感じる。地区の魅力を知っていて自信があるからこそ、その魅力を伝えるべく先駆けて交流活動に取り組んでいるのである。体験活動のなかで得られたものとして特に人脈を挙げ、もらったアドバイスは素直に受け入れなければならないと考えていることからも分かるように、他の地域の人からの意見や情報をとても大切にしている。今までなかったものを積極的に取り入れようと努め、様々な実践をして常に次の段階を目指している一さんの姿勢が、富田地区の交流活動をより活発なものにしていくだろう。

（2）多岐に渡る交流活動

次に、様々な分野の交流活動を行っている大平啓子さんを紹介したい。啓子さんは、「村の中で私のことを知らない人はいない」と語るほど、鮫川村の生活に密着した活動を行ってきた方である。元は現福島市の飯野に住んでいてその後鮫川村へ来て農協の生活指導員をしていた。その経験が現在の活動の原点とも言えるだろう。退職後は造園・音楽・歌・ボランティア活動・大学生との交流など、とてもエネルギッシュに活動している。以下では、啓子さんの現在の主な活動であるふれあいサロン、音楽、造園に関して詳しく見ていきたい。

1）ふれあいサロン

ふれあいサロンの活動に関しては、特に啓子さんの生活指導員時代の経験が生きているように思われる。

生活指導員の仕事に関連して、啓子さんは以下のように話している。「農協の生活指導員の仕事として一番初めに行ったのが、農家台帳を作ることだった。広い村なので戸別訪問は無理だと考え最小の集落で、集団で生活指導をすることにして、仲間作りのような形で、グループに名前を付けてグループ活動を行った。私が自分から提案して人を集めたり、逆にグループの方から呼ばれて行ったりすることもあったが、それぞれのグループで自主的な活動をしていたようである。当時のグループの中で、代替わりして現在も続いているグループもある。私が 20 代の頃、40 代くらいだった人たちとグループ活動をしていて、現在はその人たちは高齢者となり、そのお嫁さんたちにグループ活動が引き継がれているところもある。それが嬉しい」。こうして生活指導員をしていた頃の経験が、現在のふれあいサロンの活動をスムーズに進める助けになっていると考えられる。

上記のような経験もあって、去年から村で福祉活動として始めたふれあいサロンの先駆けとして活動を引き受けた。手の届く福祉活動を村ではできないため、地域で確認をしてほしいとのことで、お年寄りを集めているのだそうだ。そこで誰か先駆けとして実施してほしいと言われて、

自ら名乗り出たのである。徐々に同様のサロンの数は増えており、今年は８つの集落で行われている。介護の対象になっている人はひだまり荘（鮫川村役場高齢者総合福祉センター）で受け入れてもらえるが、健康で受け入れてもらうことのできない一人暮らしの人なども多いので、そういった人たちを主に対象にしている。基本的には自分で歩いて来られる人を５人以上の単位で集めている。月１回 10 時から、お茶を飲んでお年寄りが持ち寄った漬物などを食べながら近況報告などお喋りをする。ほかには塗り絵やリズム遊びなどをする。350 円は村からお茶代として支給されるので、あと 200 円をお年寄りに持ってきてもらい、昼食代にする。お年寄りたちは、お昼ご飯を大勢と食べるのを楽しみにしているそうだ。最後に次の月に食べたいものをみんなで決めて、当番を決めて啓子さんと２人で作ることになっている。他の地域ではサロンのようなものはあっても、お昼を作るのは大変だからほとんどがお昼時をはずしたものとなっているそうだ。啓子さんはそのように楽な方法を選ぶのではなく、お年寄りが楽しみにしていることを大切にしながら、ふれあいサロンを開いている。

2）音楽

農協を定年で退職してからはすぐに声楽の先生について声楽を習い、歌のボランティアを始めた。そして現在７年目となっている。ひだまり荘には最初の頃から通っていて、棚倉の特別老人ホーム寿恵園には６年、鮫川特別老人ホームなどにも行っている。一緒に歌ったり、啓子さんの歌を聴いてもらったりすることもある。障害を持つ人がほとんどであるため、一緒に何かしようとしても、簡単に思えることでもなかなか難しいそうだ。後述の音楽教室の先生から音楽療法の知識を得ながらリズム遊びのようなものをしているそうである。専門家から知識を得ることが重要だと啓子さんは考えている。「音楽は人を和ませるし、すごい力がある」と語っていた。

啓子さんは自宅で音楽教室も開いているのだが、口コミで生徒が集まり、子どもから大人まで 40 人ほどが通っている。月火金土の週４日で、ピアノが主だが、他にも声楽やリトミックも教えている。啓子さんはオーナーで場所と機材を提供し、専門家の先生が来て教えているそうだ。鮫川以外にも棚倉や泉崎、玉川からも通ってくる。子供たちが来てくれればという思いと、人が集まって来てにぎやかになってほしい、という思いから教室を開いているとのことだ。

驚くことに 2009 年９月 20 日には、鮫川公民館でリサイタルを開いたそうだ。その際に元役場職員の人から、「鮫川でもこのような文化活動をしているということを知らせないといけないし、村の宣伝になるから新聞社を呼んだほうがいい」とアドバイスがあった。そこで呼んでみたところ、その記事を見た周囲の人から反響があり、マスコミは大事だと感じたそうだ。ただやるだけでは意味がなく、発信しないと鮫川のよさが分かってもらえないということだろう。

3）造園

退職後、啓子さんは「農協しか知らない人生はつまらないから、全く違うことをしよう！」と思い、庭造りが好きだったため造園会社に入った。庭の手入れの仕方などを学び、定年の 65 歳ま

で続けた。音楽を続ける一方、歌のボランティアは土日などで、声楽の先生には週１回習っていた。造園会社の社長は理解ある人で、ボランティアのときは快く休ませてくれたそうだ。造園技能士の試験を受験し、見事合格して造園技能士の資格も取った。庭の仕事はとても厳しいので、社長には続かないと思われていたようである。「好きだから続けられたのであって、頼まれたのではやれなかった」と啓子さんは強調している。今も自分で剪定したり垣根を作ったりしていて、思い描いている庭にはあと５～６年かかるそうだが、庭のことを語る啓子さんはとても楽しそうで、輝いていた。

加えて、平成 18 年度に設立された「もりづくり 100 年委員会」の委員も務めているそうだ。これについては、「自分が造園の技術があるから口出しが出来る部分があるが、それ以上に農大生や専門家とのつながりがあってのこと」と啓子さんは言う。東京農大の学生たちが卒業研究の関係で啓子さん宅の庭へ来ていて、そういった面でも学生との交流を積極的に行っていて、専門的な知識を得る機会ともなっているそうだ。また音楽療法のことでも挙がっていたように、専門性を持った人との交流は絶対必要で、専門家の先生から知識をもらわないといけないと考えているそうである。

以上のように大平啓子さんは多岐に渡る活動を行っている。そして啓子さんは、鮫川村の今後の交流のあり方について以下のように考えている。「村の人だけでなく、よそから来ている人との交流を持てば鮫川のよさが分かってもらえると思っている。私自身よそから来たので、鮫川の良さが分かる。鮫川は良いところだから、村外の人と交流を持てば鮫川の良さを知ってもらえると感じている。また、先導してくれるリーダーがいればもっと良いところになると思う」。やはり鮫川村の良さをよく理解していることが多岐に渡る交流活動につながっているのだと分かる。これまでの経験が全て活きていて、それらの経験があったからこそ出来る活動なのだと感じられる。専門家の意見も聞いて活動をしているなど、啓子さんの持っているような積極性こそが地区を元気にする力になるだろう。

3. 見えてくる富田の良さ－民泊を通じて

鈴木一さんや大平啓子さんのお宅では以前から民泊の受け入れを行っていたが、交流事業部としては私たちの第２回目の調査が民泊の初の試みだったそうだ。民泊をさせていただいたことで、私たち学生はたくさんの富田地区の良さを実感した。それらの気づきについて以下では述べていこうと思う。

（1）暮らし

富田地区での暮らしは、私たちの普段の生活とは全く異なるものだと感じられた。民泊させていただいたときも朝は早く起きて、朝食のあとはゆっくり休む時間があった。普段私たちは出来るだけ長く寝ようとするため、朝ゆっくり休む間もなく家を出る。夜寝る時間も、富田地区では早めだった。気づくといつの間にかとっくに日付は変わっていて２時頃にやっと布団に入る生活とは大違いである。

夜になれば真っ暗で、本当の闇と静けさを知ることが出来たといっても過言ではないと感じる。

時間に逆らわず、季節に逆らわず、まさに自然に沿った暮らしをしていると感じられた。おそらく特に気を付けたわけでもなく、ずっとこのような健康的な暮らしをしてきたのだろう。私たちの中では「民泊の間は時間がとてもゆっくりと進んでいった。夕ご飯が済んで、外が暗くひっそりとし始めてもなんとまだ午後 6 時という普段の生活では考えられない時間軸の中での生活だった」という感想も挙がった。

食事に関しても、いつもは食べられないような美味しいものをたくさんいただいた。民泊の際の食事で、それぞれ印象に残っているものを挙げてもらい以下にまとめた。

印象に残ったもの	コメント
・柿とリンゴのサラダ ・かぼちゃの煮付け ・きんぴらごぼう ・インゲンの白和え ・梅漬け ・砂糖梅 ・紫蘇ジュース	それぞれ小皿に分けて配膳してもらった。見た目も綺麗で、どれも美味しかった。また、毎回魚があったことが印象的だ。味噌汁に入っていた芋殻を食べたのも小学校の給食以来で久しぶりだった。 普段は忙しさ故に、自宅生にも関わらず家でゆっくりご飯を食べるという機会が減り、買ったお弁当やカップラーメンに偏りがちだった。手間暇掛けて作ってくれたご飯が食べられるのは嬉しかった。
・色々な野菜の天ぷら ・五目ご飯 ・とれたての卵	自分で野菜をとってすぐに食べる、という貴重な体験ができた。 五目ご飯は久しぶりに食べたこともあり、すごくおいしかった。男の一人暮らしだとなかなか食べる機会がない。
・おでん(とても大きな鍋) ・大きなおはぎ ・鮫川の豆腐	おでんの鍋も、おはぎも大きくて驚いた。家ではこのように大きな鍋は使わない。鮫川の豆腐もおいしかった。
・かぼちゃのパン（手作り） ・すいとん ・自家製のお酒	かぼちゃのパンは夕食前にいただいた。手作りらしいやさしい味だったが、お店にも並べられそうなほどおいしかった。 食後には自家製の梅酒などの美味しいお酒を出していただいて、一緒にお酒を飲みながら話に花が咲いた。

また、聞き取りで伺ったお宅でもお茶と一緒にかぼちゃの煮つけや漬物などを出していただいた。人参やサツマイモの入った野菜の寒天をだしてくださったお宅もあり、「野菜の入った寒天

は初めて食べたので驚いた。特にさつまいも味がおいしかった」という感想が挙がった。地域で、あるいは自分の家の畑でとれたものを最大限に活かして工夫を凝らしていると感じられた。

どのお宅でも、基本的に食材はほとんど買わず、家の畑で作った野菜とか季節の山菜で料理をしていると伺った。とにかく健康的な食事だという印象である。私たちの場合、学校に夜までいることも少なくないので、１日のうち２食（昼食・夕食）を買ったパンやおにぎりで済ませてしまいがちである。家から持参したとしてもおにぎり程度で、民泊先でいただいたような立派なおかずはない。朝はもとからしっかり食べることはあまりないので、普段の生活では栄養が十分ではないだろうと思う。そして朝から夜まで学校にいるとなると、自宅から通っていたとしても家族と食事の時間が合わず、一緒に食卓を囲むことのほうが稀である。民泊ではみなさんとお話しながらおいしい料理をいただき、食事を楽しむことが出来た。当たり前のようで普段の私たちには難しいことなので、これも富田地区の良さのひとつだと考える。

（2）人々のあたたかさ

富田地区での暮らしを見ると、近所の人とも関わりが少なく人付き合いが薄れがちになりつつある普段の生活との差を実感する。お茶の間に座っているとご近所の方が尋ねてきて一緒にお茶を飲みながら話すこともあり、それ以外のときもしばしば話題の中に地域の人の名前が挙がっていて互いによく知っていることが分かり、地域の人々とのつながりの強さが感じられた。民泊させていただいたからこそ気づくことが出来た富田地区の方々の優しさやあたたかさがあったと思う。以下は、学生から挙がった民泊についての感想である。

・互いに民泊は初めての経験だったので、少し緊張していた。それでも凄く丁寧にもてなしてくださるなど、寛いで話せる雰囲気が出てきてとても楽しい時間が過ごせた。

・１対１でも、初対面とは思えないほどリラックスして話すことが出来た。

・１年近く帰省していないため、久しぶりに「家庭」に身を置いているような感覚だった。家族に会いたいなあと思った。家庭や家族の大切さ、素晴らしさを改めて感じることができた。

・「家だと思って過ごして」。民泊先のお宅に伺ったとき、最初にそう言ってくださったことが強く印象に残っている。「お客さん」ではなく「家族」として接してくださることがとても嬉しかった。

・民泊先では、まるで本当の家族か親戚のように温かく迎えていただいてとても嬉しかった。しかし、食事の準備や後片付けは全て奥さん任せであり、こちらは上げ膳据え膳で、お手伝いがほとんどできなかったことが悔やまれる。何かお手伝いできることがあると

こちらの気も楽になるし、また一緒に作業をすること自体も私たちにとっては楽しみの一つなので、お客様扱いせず気軽に声をかけていただければと思う。

学生から特に心に残るエピソードとしては、以下のようなものが挙がった。

青戸さんが昔出張に出かけた先でカツ子さんにと買ってきた浴衣を、八朔踊りに行くときに着せていただいた。農家の嫁は忙しく着る機会を逃してしまい、箪笥に大切にしまってあったものだそうである。そのとても心温まるエピソードを聴き、大切なものを貸してくれたことに感謝の気持ちでいっぱいになった。元々ダンスは苦手だったが、せめてものお礼にと八朔踊りは恥を捨てて一生懸命に踊った。

また、青戸さん宅には 98 歳というご高齢の方がいる。名前は尚さん。お年寄りの世話をするのは体力的に大変で、きっと辛いと感じることもあるだろうと心配していたところ、青戸さんご夫妻は「尚さんは家の宝物だから」と口をそろえて言う。尚さんが何か話す度にきちんと耳を傾けて嬉しそうに聞く。尚さんが 100 歳になったら 2 人でハワイに旅行に連れて行こうという夢があるそうだ。なんと微笑ましいことか。お年寄りは宝物、長寿はお祝い、都会の介護事情ではきっと忘れてしまっている温かい心がここにはある。

８月末の第１回目の民泊のときには八朔踊りに参加させていただいた。そのときに予想もしていなかった浴衣を着せていただき、民泊先の方々の優しさに皆で感動していた。お祭の場では、それぞれ「うちの娘！」と誇らしげに他の方々に紹介してくださった。二回とも帰りにはお弁当とお土産を持たせてくださった。いただいたお土産は部屋に大切に飾っている。本当に自分の子どものようにかわいがっていただいて、二度目の民泊でおばあさんには「もう本当の孫だよ」とまで言っていただいたことで、富田地区は自分にとってすでに第二の故郷のような存在になりつつあると感じた。

それぞれの感想からも分かるように、決して民泊には慣れていないながらも受け入れ先のお宅の方々はとてもあたたかく迎えてくださった。普段と違った食事や生活で迎えるのではなく普段通りの生活の中に私たちをすんなりと受け入れてくださったのが、私たちにとって嬉しいことだった。それが感想の中にある「家庭」や「家族」というものを感じさせたのだと思う。

(3)地区への思い

それぞれのお宅で食事をしているときや食後に一緒にお酒を飲んでいるときに、富田地区への強い思いが感じられるようなお話をたくさん聞かせていただいた。若い頃の青年団活動のお話や、昔の八朔踊りはどうだったか、などとても興味深い内容ばかりだった。ここでも、印象に残ったエピソードなどをそれぞれ挙げてみた。

・薬師堂の歴史的由来について聞かせていただいた。八朔踊りと同じ頃に薬師堂の神事として、昔から引き継がれてきていた。何故ここまでの価値が生まれるようになったのか、などどんどん話題が広がり、話が尽きなかった。

・八朔踊りから帰ってきた後、今回は成功したけれど、今後次の世代に活動が続かないのではと心配していた。また青戸さんは現区長として、各自の活動をどう繋げていくかは課題として考えているそうだ。

・第２回目調査・第３回目調査で別のお宅に民泊させていただいたが、お世話になったどちらの方も、地域のこと、自分の人生のことなど生き生きと語っている表情が印象的だった。

・鈴木一さんはインターネットを通じて、全国の自然愛好家の人たちと交流・情報収集を図っていて、「自分の暮らす環境が本当に好きなんだな」と感じた。

・大平啓子さんからは今まで民泊を受け入れた人々のお話も少し聞いて、人との出会いを大切に、そして楽しんでいると思った。

・前区長の大平さんのお宅では、やはり八朔踊りなどに関する歴史的なお話を中心に聞かせていただき、「八朔」という言葉の意味から、「富田薬師如来立像」などの文化財についての説明まで詳しく教えていただいた。さらには図説の該当ページをコピーして渡してくださった。

・若い頃の青年団活動について詳しく聞かせていただき、その頃の活動が現在の活動にもつながっているのだろうと思った。

このように、みなさんがそれぞれの形で地区に対して愛着を持ちながら富田地区で暮らしていることが分かった。ここまで自然体験や交流活動に関しては個人的に活動している方についても取り上げてきたが、地区への熱い思いを持っている人たちは他にもたくさんいる。特に八朔踊りについては、聞き取りの際にも「復活して良かった」「これからも続いてほしい」という声が多数

聞かれ、伝統行事をとても大切に思っていることを実感した。地区の歴史に誇りを持ち、伝統を守り続けたいという強い気持ちが感じられた。

おわりに

「自然の中での交流活動は気づきから始まり、興味・関心が生まれ、それについてより深く知ろうとして知的好奇心が強まり、それを楽しみに変えて、守ろう、伝えようという流れとなる。気づきはその最初のステップであって、特に楽しむのが大切だ」と鈴木一さんは言う。体験活動に力を入れているからこそ出てくるのであろう、とても考えさせられる言葉である。交流はまだ始まり以前のもので、「気づき」が生まれたところが本当の始まりなのだ。交流事業部が目指す「体験型」交流は、何もかも新たに創る交流ではなく、地域のもてる魅力を十分に活用しようとしていると感じられる。現在活動は準備の段階であるが、富田地区は「里山ふれあい体験の森」など自然体験や交流活動に活かすことの出来る空間であふれているので、今後の活動によって地区の魅力を広く伝えていけるのではないかと思う。

個人で積極的に活動をしている方々もいるということで、富田地区に住む他の方々がその活動についてより詳しく知ることが重要なのではないかと思う。交流活動から得られる気づきやつながりの魅力を知ることによって地域としての交流活動に興味を持ち、自ら関わろうとするようになれは、さらに良い形になっていくのではないだろうか。夢づくり協議会の事業は地区の中での住民どうしの交流を深める良い機会ともなったそうだが、他の地域から訪れてくる人たちとの交流で多くの気づきを得て、自らの暮らす地域の良さを発見し、ますます富田地区の人々が元気になるきっかけともなるだろう。そうして人との交流の中で得られる情報も、重要な気づきの一部であると言えるかもしれない。また一さんも話しているように、楽しめる事業であることが重要であると思う。民泊先のお宅で「学生が泊まりに来ることで元気になる、楽しい」と言っていただいた。互いに気づきがあったり、元気をもらえたりする。地区を、自然を、そして人との出会いを大切だと思っているからこそ、現在個人的に交流活動を行っている方々がいる。そういった気持ちがあるから活動しているのだと、調査を進める中で分かってきた。地区の方々はそれぞれに富田地区に愛着を持っているのだから、それを個人から全体へ、徐々に活動を大きなものへと広げていくこで地区への自信や誇りもより確かなものになっていくだろうと感じた。

私たちは今回の民泊や聞き取りを含めた調査で、富田地区の方々のすばらしさを肌で感じることが出来た。特に人々の魅力は交流してこそ分かるものである。人々のやさしさや、それぞれが地区に対する強い思いを持っていることは、実際に富田地区に入ってみなければ分からなかった。都市ではこのようなあたたかさに触れることができる機会は決して多くない。人々が求めている安らぎや癒しのようなものが富田地区にはあると感じる。地区にもとからある自然環境の魅力、そしてそこに住む人々の魅力が、交流事業という取り組みによってさらに輝きを増すのではないだろうか。

最後になりましたが、今回の調査に協力してくださった富田地区の方々、民泊先のご家族の方々、本当にありがとうございました。